るらい目に遇しおつた。醫者「こりや仕かけの負では無ふて、妾の勝じや。旦那「汝も旦那を投るとは、ぶちつけ千万な奴ぢや。　妾「お前さんも男だてらに。オチ「土俵もない弱いお方ぢや。

三熊の野

人物。○坊主醫者――△惣髪醫者

作物。網舟舳先に坊主醫者羽織一刀にて網を手にさげて居る、惣髪醫者舟をさし、凡て川狩の体。

舟さわぎにて。○「やれ〳〵當るぞ〳〵しつかりさゝんい。△「夫でも舟がぐる〳〵廻るもの」と。擢を舟の下へ入れ難義して。△「あゝ來てくれ〳〵。○「如何した〳〵。△「舟が櫂の下へ這入つて抜ぬわい。○「何を云ふのじや、舟が櫂の下へはいつてたまるものが、櫂が舟の下へ這入つたので有ふ。△「イヤもう斯ふあつてからは、どちらこちらは無い、早ふ助けてくれい。○「ゑゝ不器用な男じやこと。後よりかゝへて。○「それ抜いたり。△「やつとな」とやう〳〵に抜き。△「やれ〳〵危ないかな、既に河水に沒せんと欲した、若し一命を絶して見たがよい、此方はいとわぬが、無双の名醫を失ふて一天下のなげきにある事じや。○「誰がなげくものて。△「イヤ横川の蕎麥屋に三百錢の借財がある、それが歎くじやあろふ。○「違ひなし。△「時に雜談は扨ておき漁はいかゞ。○「怪からぬ事驚じや〳〵。△「驚とは奇妙、然し足下の網にかゝるとは、

天命つたなき奴ぢや。　○「得て此奴手を嚙むてや。　△「そう〳〵手をば氣を付るがよい。　○「イヤ必らず勞することなかれ、そこが所謂手練と云ふものゆへ、こう持つとソレ見玉へ、ちよつとも動くことあたわず」と見せる。　△「ハヽハ、、、動かぬ筈じや、馬の沓ぢやかな。　○「ゑゝほんに馬の沓ぢや、いま〳〵しい。　△「ゑて此奴手を嚙む、へん馬の沓が手を嚙むのを見たことがおい。　○「そうも云へぬてや、草履の花緒が足を喰ふことがある。　△「おに阿呆らしい、ソレ〳〵そちらのは鰻じやないか。　○「おゝうおぎ〳〵、鰻じや〳〵、おいでの蒲やきどじやう汁。　△「やかましい魚が逃るがおな。　○「ところが逃さぬ、コレ斯ふ持つたらちよつとも動かぬ、ソレ如何じや」と見せる。　△「ハ、、、、動かぬはづじや、井戸縄のくさつたのじや。　○「ゑゝ又たしくじつた。　△「大先生も今日は七が廻らぬな。　○「さあ如何でも魚は發表したと見へる、全体足下の舟のさしよふが惡い、舟人と網打は、いわゆる三絃と淨るりで、相氣せねばゆかぬ道理、其三味線の律が合ぬやうな物じや。　△「仰せの通り三味線は律が合ず、其かわり淨るり語りは調子いおして居るて云ふやうな物ぢや。　○「まことに下手の集會じや。　△「こう足下の非をあげるではおいが、子釣すれども網せずと、かりにも仁術を行ふ醫者たる者が、殺生はよからさゝん事ぢや。　○「何を云ふぞい、是が殺生おら、迚も醫者にはおられぬ、七先で人を害す、これ程殺生な業はおい。　△「如何さま、醫者におるより川魚屋の方が大分罪が輕いの。　○「時に何にも取れぬが阿呆らしい、こんな事おら玄關で

丸薬捻つて居る方がましぢや」と。舟さわぎ唄にある。△「奇妙〳〵花やかある舟が來た。○「どれ〳〵よう、美かるかあ艶かるかあ、李延年が一たび顧り見れば、人の城をかたむけると唱ひし有樣じや、ハア此妓は北地か南島か、いや優かるとこゝを見れば、中廓と見ゆるあ。△「ありや皆あ新町の藝子か、ゑらい美くしい者じやな、あゝ藝子に客が、ウフム……。○「是はしたり、川へはまる

があ。△「おつと承知いたした。○「たしかめ、外聞のわるい、然し大分の散財じやわい、こうつと藝妓が六個、六頭子（たいこもち）が三個、仲印が二枚、ヘン舞子の半線香を一薬加味したかあ、あの客も黄金を費やすのみにして土氣を離れぬ容躰ぢや、彼もすこぶる難治の症ぢやわい。△「あの客も古世家と見えて調合が多い、然し遊びは一通りぢやあ。○「そうじや照怯常の如しと云ふ世界ぢや。△「ありや皆上とやら云ふのかあ。○「勿論揚ぢや、他所行あぞと云ふて増が付く。△「そんから此方て云ふから、追脈別惣と云ふやうかものかあ。△「まあ〳〵其筋ぢや、時にもう少し上へやらろふか。△「よかろふ〳〵」と、舟を少しさす。○「おつとこゝらで宜ろふ、此あたりが腓腎のあたりじや。○「それ當るぞ。△「おつと」

舟を止る、坊主網打つ。　△「相變らず一文字じや。　○「惡口云ふまい」と、網をたぐる。　△「先生脈体はいかゞでございますか。　○「怪しからぬ胴氣が打ちます、ハア仕もふた。　△「逃したか。　○「いゝやかゝつた。　△「そんなら好いじやないか。　○「かゝつたとは掛うたが、網が杭へかゝつた。　△「めつそうな事した、先生の網じや。　○「破つたら言分がない。　○「大事ない、川へはいつて取るぞ」と、着物の裾をとり前へはさみ川へはいる。　○「あゝ情ない、雨が降り出した、其笠をこちらへ」と。笠をかぶり向を見て。　○「おゝい茶船のう、其網を取つて下され、頼みます〳〵、いま〳〵しい開ぬ顔して行きくさる」と、これより蔭の上るりにある。上ル「きかぬ顔して船人は、跡白浪と行きすぎる。　△「もうよし頼まぬ、わしも這入る

ぞ」と、又た蔭の淨るりにある。上ル「よし〳〵思ひ知らせんと、うしほを結んで手水とし」。　この内兩人川へ這入り、いろ〳〵あるうちに舟を樂屋へ引つ込む。　○「コレ〳〵舟は如何した。　△「舟は」と見てびつくり。　△「やゝ舟は流れて了ふた。　○「鈍おおとこじや舟を流して如何あるもので。　△「おゝい〳〵屋形のう、その船とめておくれ、頼みます、おに、面倒あ、るゝ根性のわるい舟人かじや。　○「何と云ふてる」ぞ。　謠曲の調子にて。　△サメヒ「左様お平手くそ網は、此方にかまひ候まじ。　ボケ「と云ふて居る。　○「憎い舟人奴じや」と、これより謠曲の調子にて。○サメヒ「やあ其舟止めよ、其舟とどめずんば、この藪醫者がざつふと入て怒りおころふずるぞ。　△「そんなに權柄に頼んだら、猶ほ止めてくりやせん。　○「先づ網だけは

どらまへた。　△「早うとりんか、一体貴公が鈍からおこることじや。
○「其やうにせいたかてゝ、如何もおらぬ　△ウタヒ「一体鈍から二に
せいたか　○ウタヒ「三にぐづから　△ウタヒ「全体やくたい是にこりよ」
と。どろ〳〵にて笠風に散る仕かけにて、額に笠のあて殘り兜巾と
ある、網の紐を引ぱり取ふとする仕打にて、檀風のいのりの見得と
ある。惣髪の醫者は駒若とありこゝろ、此間いのりの囃子、よきと
ころにて止る。　△「如何じや網はとれたか。　○「如何や斯ふやら手
に入つた。　△「このまゝ捨て祈るにも祈られず。　○「如何で不器用
な我々あれば。　△「此位の。　○「麁相は。　オチ「檀風も網打（何程も
有打）のことじや。

年越の餡

コシラヘ『甲は亭主、乙は掛取にて好みの風、踏へ床几を持つて出る。
乙「へイお事ふさんに御座りましよ。　甲「これは〳〵安本丹屋の丹
助さま、内方の借も段々延引いたしましたが、何卒」とふまへを出
して。　甲「先のせつぎ（節季）にしておくれなされ。　乙「ゑゝ又。
オチ「ふまへ（お前）さん床几（常時）そんな事云ひなさる。

畫こんぴら

コシラヘ『甲乙何れも醫者六尺のこしらへ、息杖を何れも持つて出る
甲は五八、乙は喜助、すべて鎌倉山の源左衛門、荒次郎の思ひ
入れ、一つのたんぽを持て出る。

甲「いや醫者の供もろいもんじや、此方の先生は大の呑人じやによつて、何時でも御馳走じや、又た横町の木綿井堅約さんは、ろらい仕末じや、此方の先生は何程おごつても、とんと叱らんが、やつぱり驕るもの醫者叱らず（久しからず）か知らん。　乙「旨いものじやか、ちよつと一杯呑んで來ても、たんぽ一本いがめて來たわい」と。乙の喜助が懷中よりたんぽを出して見せる。　甲「おい／＼喜助、手前は旨いことをして來たか。　乙「おゝ五八か、ちよつとたんぽ一つきめて來たが、こいつを賣つて又た一杯呑めるじやて。　甲「おれも錢がおいが、其たんぽで一杯呑みたい、ちよつと貸してくれ、何處ぞで賣つて錢にしてくるから」と、彼のたんぽを兩人の間において、鎌倉山の鶴の爭ひの思ひ入れにて、たんぽを鶴に見たて、息杖を弓の思ひ入れにて、甲五八は荒次郎、乙喜助は源左衛門の思ひ入れにて、兩人とも歌舞伎調子にあり。乙カブキ「あゝいや、拙者が曲めし（射止めし）此たんぽ（丹頂）、御手かけられて何としめさる。甲カブキ「いや余り見事あたんぽ（丹頂）ゆゑ、お田で（御殿で）御馳走（御披露）しやうと存じて。乙カブキ「スリヤあの御田で（御殿で）。　甲カブキ「如何にも。甲ボケ「何もお前私が盗んだたんぽを賣つて、田樂買いでも好いがお。　甲ボケ「爾うじやけれど、私も一杯飲みたいがお、佐のゝ錢おいもん（源左衛門）では如何もあらん　乙ボケ「そんなら私をわや（荒）次郎にするのか。　兩人「こりや二人あがら。　オチ「おまいくらじやま（鎌倉山）をしたのじや。

一寸八分

長物「凧、凧糸、うおり。

口上「さて淺草の觀世音は秘佛でござりますから、こゝへ借りて參りますことは出來ませんが、お丈は一寸八分で御座いますそうな、夫は曲尺かと仰有いますが、おーに鯨でございませう」と、うおりを出して見せ。口上「あの觀音さまを引上げましたのは、三社でございます、すなわち是が竹おり」と。うおりの竹を出し。口上「玉おり」と云ひて。糸の玉を見せ。口上「それにうおりで三社でございます、代料は五十の塔で御座います、前にも申す通り、秘佛でありますから、よんどころなく雷神と風の神を御覽に入れます」と凧を見せ。

口上「この凧にうおりを付けて上げまする」と。紙のうおりを見せて。口上「ぶう〳〵申します、これが卽ち神鳴りで御座ります。又た揚げますと、ひつかゝる事もござります、それが飛んだり上つたり、かゝつたり、見世の賣物でございます、境内に鷄が居りますが、あれはめんどりが尾をはやしたとの事でございます」と。凧の緒を見せる。口上「又た手洗鉢では、始終に水を汲んでおります」と、凧をまわし、中にも觀音さまは佛さまだ、夫れゆへ章魚は似合ぬと仰せられますが、決して生臭い物ではございません、何故あれば裏を御覽あさい。オチ「精進骨のあげ物で御座ります。

後の祭り

コシラヘ『甲は家老。乙は若徒のこしらへ。

乙「ハッ申し上ます。

甲「あわたゞしい何事じや。 乙「ハッ只今御寶藏へ曲者忍び入りしと相見ゐ、御臺ごころの重寶、すいのふの御かゞみを奪ひ取り、器物はあきからにして立退きました。 乙「して〳〵其曲者は、何れから逃去りしぞ。 乙「裏門の高塀を」と。すいのふを出して。 オチ「のりこしました。

觜ちがひ

コシラヘ『甲は生田傳八、乙は渡邊志津馬のこしらへ。

甲「以前は郡山の家中で生田傳八と云ふ者だが、同家中の者をばらして立退きしより此仕合せ、これはしたり蛙も口から、恐るべしおそるべし、日も早や西山にかたむけば、どりやそろ〳〵と歸るとしやうか。 乙「あいや待つしやれ、生田傳八先年我が父渡邊勘負を討つて、逐電おせし卑怯もの、それがしこそは同苗志津馬、此處で逢ひしは浮木の龜、其方をうどん華の春を高ふするのじや、尋常に勝負〳〵。 甲「おい鳥渡待てんか。 乙「イヤ待てとは遲れたか。 甲「いや遲れはせんけれど、ちよと勝手が違ふた、わしは郡山で遠城怠

左衛門を討つて立退いたのじや、貴公に恨みられる筈はおい、それでは勘定がちがふ。　乙「いや傳八さんとやら、お前私に討れあされ其代り私が尋ぬる又五郎を、遠城氏にうたせたら、それで算用がすむじやおいか。　甲「ほんに爾したら。オチ「かたきうらみ（かたみうらみ」が無ふてよいわい。

無茶の旅

コレラヘ『甲は旅人、乙は蕎麥屋の主人。

甲「はあん、此處は一の谷じやか、源平の昔しが思ひ出される、ふむこれが名物の蕎麥屋か、餘程腹がへつた景季ときた、これ〳〵亭主あつもり蕎麥一膳ふるまふて下され。　乙「さあお上りおされませ

甲「あゝ好い加減じや、さら〳〵〳〵、ま一つ下され。　乙「ハイ〳〵。　甲「さら〳〵。　乙「ハイ〳〵。　甲「さら〳〵、あゝ旨いさら〳〵〳〵、ま一つ下され。　乙「ハイ〳〵。　甲「さら〳〵さら。　乙「ハイ〳〵〳〵。　甲「さら〳〵〳〵、あゝ久し振で腹があをつた、さらば參ろふか」と出て行く、亭主はびつくりして追かけ、熊谷の身振にて。乙カブキ「おゝいい〳〵蕎麥屋かたらせ給ふは、平氣の旅人、無ちやんの財布あつもり蕎麥の喰逃げ、斯く申すそばやは、煮出しのかつを十本、四五人の板がしらつまみ喰ひのひどふおまたれ、見參申さん、おゝい〳〵。　甲「錢をくれいか、ゑらい長口上じやか」と言ひつゝ、又も行ふとする。乙カブキ「返させたまへ、おゝい〳〵。　甲「イヤもふ最前から、代へて喰ふたよつて、腹はぼてれん

じや」と。行ふとする。　乙「ゐらい無茶あ人じや、おい錢おくれんか。　甲「ハヽア價か、わしは平家の落人で、一もんあしじや、又かさねて拂ふてやる。　乙「ゐゝは、そあいに不甲斐性てる人あら、見のがして進ぜる、ちやつと往んせ。カブキ「ヤ、、、、あれ彼の通り、跡からだん〳〵追人が來る、是非に及ばぬ」と、甲を取つて伏せ、つく〳〵と顔を見て。　乙「痛わしやゐらい貧相じや、おあしはいざよふ十六もん、十ぜんで百六十四文、私が臍くり錢、取りかへて置くさかい、さゝ早ふいきあされ。　甲「それは忝じけあい、まことや旅はしみたれ蕎麥(道連世は)あさけ。　乙「いや無官の太夫の首打では無ふて。　甲オヤ「むちやんの財布が喰勝したんじや。

コレラヘ「甲たぬき娘、乙若い衆。

甲のたぬきむすめが三味線彈いて行く跡より。　乙「おい姉さん、最前から聞いて居れば、お前さんは聲と云ひ音〆と云ひ面白いこと、何卒あのきぬたを一つ彈いて聞してんか。　甲「おほゝゝゝお恥かしい、併しお望みあれば、不調法あがら彈きませふわいあ。　乙「それはかたじけあい、さゝ所望じやゝ」と。この内たぬき調子を合して、八千代獅子を引きかける。　乙「おつと待たり、姉さん其れは違ふた、そりや八千代獅子じやあいか。　甲「左樣でございます、これが私しの八千代獅子じあわいあ。　乙「何を云つてじや、じやら〳〵

とほんまにきぬた聞してへあ。甲オチ「ハテ狸のきぬたは八千代獅子じやわいあ。

げちく

コシラヘ『甲武士、乙雑兵。

甲「コリヤ〳〵皆の者、平家の落人と見たらんには、獨りも洩さずくゝし上げて引ずり參れ、褒美には南地の娼妓を一晩おごるぞ、ぬかるな〳〵。　乙「拙者共は女はきらひでござる。　甲「然らば伊丹の銘酒。　乙「酒もきらひで御座る。　甲「では堺名物大寺餅にいたそふ。　乙「大寺餅も嫌ひでござる。　甲「麓のすしにいたさん。　乙「すもじも嫌ひでござる。　甲「はてさて困つたものだ、夫もきらひ、これもきらひ、ふん。オチ「然らばきらひ(家來)共參れ〳〵。

樽廻し

コシラヘ『甲は與次郎の扮装、樽を負ふて、砂持籠をかたげて出る、乙は老母のこしらへ。

甲口淨瑠理にて。甲上ル「與次郎は息せき砂持籠」と。踊りながらに出る。甲カブキ「母老人、今戻つたぞや。乙カブキ「おゝ兄。オチ「踊り(戻り)やつたか。

口から高野

コシラヘ「甲は巡禮すがた、乙は若いもの。

飯の施行と書いたる札がたてゝある。甲「これは有難い、飯の施行がある、一杯御報謝おねがひ申します。乙「さあ〳〵精出して喰べて下され。甲「これは有がたい、ガサ〳〵〳〵、ハテ旨いことだ。乙「ソレお代り。甲「ガサ〳〵〳〵。乙「ソレおまんまじや。甲「ガサ〳〵〳〵、お代じや。乙「おつと夫れよそふた。甲「ガサ〳〵〳〵。乙「それ飯。甲「ガサ〳〵〳〵ガサ〳〵〳〵。乙「こりや忙しおい。それ飯じや。甲「あゝ旨い、ガサ〳〵〳〵、ハイお代り。乙「おつとお代り、それ飯じや、こりや強ふ忙しおい、お前は十方もおい大食じや。お前はまあ如何した人じや。甲「ハヽヽヽ。オチ「廿四杯(罷)参るものじや。

糸ぐるま

コシラヘ『婆々一人、老爺三人、丁稚一人。

婆々が糸ぐるまをかたげで。婆々ワキ「來いと云ふたとて往れた道か道は四十五里波の上。老爺甲「ちい。老爺乙「ちい。老爺丙「ちい。丁稚オチ「ちよき(長吉)。

京茶の子

コシラヘ『甲は道成寺の白拍子の扮装、さくらの枝に土瓶をくゝりつけ擔げて出る外に乙丙は坊主すがた。

甲はいろ〳〵科ありて。甲カブキ「我は此あたりに住む、白拍子にて候

うけたまわれば此御寺に、鐘の供養がござんすそふな、何卒拜まて下さんせぬか。乙カブキ「イヤ〳〵女人はかたく禁制のこの山内。丙カブキ「女は一人でも半分でも、拜ますことはならぬ〳〵。

甲ボケ「おゝ堅やの、あの爾う云はんと、何卒拜まして下さんせいなあ。

乙「さてもしつこうに云ふもんじやおい、あらぬ〳〵」と云ひながら、覗いて見てびつくりし。乙「ヤ、、、、是は怪しからぬ、ぼつ

とり者じや、好いは拜まして進じやう。丙「イヤ〳〵是は如何したものじや、女人は一切禁制の場所へ、壹人はおろか半分もまかりならぬぞ」と云ひつゝ、表をのぞきて。丙「おゝ、いやまかりある〳〵さま〳〵先づ〳〵是へ御入り候へ。甲「おゝ嬉しやの拜まして下さんすか、そんなら其お禮に舞一つ舞ふて見せふわいなあ」とこおしあつて。甲カブキ「鐘に恨みはかづ〳〵ござる、初夜の鐘を撞く時は」と。宜しく所作あるべし。乙丙「妙々々々々々、時に其さくらの枝に土瓶をばくゝり付けたのは、はゝあ何處も彼もふるもふてくれる看板か」と。兩人白拍子を捕へて惡身すると。甲「あゝ是れさわりあさんな、此土瓶から。乙丙「鬼が出るか。甲「いゝゑ。オサ「ちや(蛇)が出る。

兩國夕涼み

景物『膳部。

口上「東京第一の夏の名所を御案内いたしませう」と。膳部の喰ひあらしたるを持出して、汁椀の蓋を取り。口上「おや奇麗に喰つてありますから、乃ち空開き、ホイ違つた、川開きの景で御座ります」と膳の内を指さし。口上「向ふに舟皿や猪牙、いや猪口が浮いて居りまする、おや〳〵皿に何があります、おーる程、鮒の尻尾だから花火で無ふて、おつと鮒尾で御座います、して此道具は三度の食事に用ひますから、三食(桟敷)の設けでも御座いませう」と言ひあがら、杉箸を見せ。口上「大分黒くなつて居りますから。オチ「兩黒箸(兩國

橋)の納涼でございます。

花違ひ

コシラヘ『甲は菅原の櫻丸の切腹場の扮装、乙は忠臣藏判官切腹場の大星力彌、丙は仝じく檢使の石堂右馬之亟。

幕明く、さくら丸出で來り、宜しく口上るりにて。甲上ル「兄弟夫婦に引きわかれ、取り殘されし八重の身の、仕舞もつかず物おもひ、思ひがけなき納戸口、かたお片手ににつこと笑ひ」と。口明の上るりを語りしまひ、櫻丸の甲の出にあり、四方を不思議相に、きよろ〳〵と見廻し。甲「八重々々、はて八重(誰)も居ぬか、何處へ往たのじや、時に私も腹を切らねばならんが、もう老爺さんも出そうか

ものじや」と云ふておると。乙の力彌三寶に九寸五分を上せて出におるこれも口上るり。乙上ルリ「力彌御意をうけたまわり、豫て要意の腹切がたい、御前にさし置き」と。力彌出にありて、主人判官さんと違ひ、菅三のさくら丸が眞面目に座しおるを見て、吃驚りの見得宜しくあつて。力彌「御主人判官様と思ふたら、全体お前は誰じや、

甲「そう云ふお前は、老爺白太夫さんかと思つたら違つてる、全体お前は誰れじや。　乙「此方か、此方は、エヘン、大星由良之助のせがれ、力彌じや。　甲「私が老爺は白太夫と云ふて、茶瓶あたまの爺さんだに、お前は夫れに引代へて、前髪天窓の、若い衆じやゆへ、禿（はて）めんようおと思ふた。　乙「私も又た御主人判官様とこゝろ得て、三寶に九寸五分を上せて出て來たのだが、鹽谷は（ゑらい）

間違ひじや。　甲「時に力彌さんとやら、私も腹を切らんならんが、白太夫が留守かして、出てくれぬゆゑ、大層拍子抜がして了ふた、ところで、近頃申しかねたが、その九寸五分しばらく貸しておくれあさらんか、腹切つて了ふたら、私が直に持つて往て返しに參りますから。　乙「そんならお貸し申しまするから、手取り早ふ腹切つてお戻しあされ、とてもの事じや、此三寶も一所にお遣ひあされ。　甲「それは有難ふござります、左樣あれば御無心あがら、鳥渡お借り申します、お蔭さまで切腹が出來ます」と。さくら丸は三寶を受取り、切腹の身ごしらへをしあがら。　甲「大きにお待ち遠さんで、直に腹切つてお返し申します。　乙「御ゆるりとお切りあされませ、その間に一服下さります」と。力彌此方に控へて煙草を呑んでる、と

こへ樂屋より。「御上使」と觸れ出し。之をきつかけに、丙の石堂右馬之亟口上るりにて。丙上ルリ「入り來る上使は石堂右馬之亟」と。右馬之亟は上下の扮裝にて、しづ〳〵と勿体らしく出來る、此方の力彌煙草を呑みながら、右馬之亟の花道頃合の所に起ちしを見て。

乙「上使あれば罷り通る。　丙「そりや乃公が云ふ臺詞じやがな、然し此所はチト勝手が違つてるやうだ。　乙「大違ひです、こゝは鹽谷の屋形じやございませんぜ。　丙「へエン夫じや此所は何處です。　乙「此所は佐田村の白太夫の宅でございます。　カブキ「御上使さまにはいざ先づ是れへお通り下さりませ。丙カブキ「役目あれば御免あれ。ポケ「そんな殺生な今時分に、そんな臺詞を演られては、拍子抜がして了つて工合が惡い、併し斯ふもして居られんから、通して貰ひます

わ、何誰も御免」と。右馬之亟正座に通り、四方見廻し不思議そうに。　丙「おーる程、此處は佐田村の白太夫の宅ですな、途方もない間違ひをしたものだ、上使で(如何して)こんな所へ來たんか知らんて、大躰供の家來がわからん奴だ、家來(ゑらい)倒しもんだ。

乙「右馬之亟さん、私しも間違ふて此處へ來ましたんで、この腹切が終ひ次第、御一緒に鹽谷の家形へ御供いたしませう。　丙「誠に左樣仰有つて下さると、大星力彌(大に力)にあります、石堂に(一緒)にお供を致します、併し鹽谷家形にては、上使の來やうが遲いと、大星判官あつて(大方腹立つて)、さくら丸(さぞかし)いられませう」と。此方二人が問答を、腹斬りかけて聞いて居たさくら丸が。　甲「もーし御兩人樣、私しの腹切る時は、いつでも老爺の白太

夫が、念佛を唱へてくれますが、今日は來てくれませんで、如何やら念佛が無いと、切腹に拍子抜けがして、工合が惡ふて切られません、御面倒おから、一つ念佛をお頼み申します。乙「宜しい、心得た、一つ念佛をやりませう」と。乙の力彌は鉦を叩きおから、右馬之亟は頬に手をあてゝ、口上るりにある。丙上ルリ「この撞木で介錯すれば、未來永刧迷はぬ功力。甲カブキ「利劍卽是、彌陀名號。乙「おまいだ」と、さくら丸口上るりの中に、腹切のこしらへする。乙「おむあみだ」と、この淨るりの念佛の節、何時か詠歌節にある、さくら丸は調子に上せられて、三寶と腹切がたおを持つて、そろ〳〵と踊り出すと、詠歌の節にて。乙「おあまいだあゝあゝ。甲「おあまあいだあゝ。丙「おあまあいだあゝあゝ。乙「これはしたり、腹も切らずに浮れるとは、如何したものじや、石堂さまも何故だまつて放ておきおさるのじや。丙「まあいよいわい。オチ「踊る者使者呵らず（驕る者久しからず）じや。

富士　松

コシラヘ『甲は、ワキ、乙は太郎冠者。

甲「是はこのあたりの者でござる、此中は太郎冠者が、主にいとまを乞ず何方へか居りそふて御座る、うけたまわれば昨夜まかり歸つたよし、今日誰か宿元へまゐり、きつと切諫加よふと存ずる、まづ急いで參ろふ。道行「まことに暇を乞ふたぞおれば、五日三日は遣そふもの、忍ふで參つただん、言語同斷腹の立つことでござる、ヤー

何かと申すうち、早やこゝじや、然しそれがしが聲を聞けば、留守を遣ふも知れぬ、作り聲にて呼び出そふ」と顔へ扇子をかざし。甲「物もう」乙の太郎冠者出づ、

乙「表に聞き馴れぬ聲にて、物もうとある、案内は誰ぞ。甲「身共でござる」と。このところで顔見合す。甲「すさりおろふ。乙「ハヽア。甲「おのれ此中は主にいとまも乞ず、何方へおりそふた、まづ直ぐに言へ。乙「願ふたりと

も出まいと存じ、忍ふて富士禪定をいたしてござる。甲「富士禪定をすれば主に暇を乞ぬが法でゐるすか。乙「ハヽア。甲「きつと切諫の加ふと存じ參つたれども、禪定とあれば、富士の樣子も聞きたし今日はゆるす、其處を立て。乙「それはまことで御座るか。甲「まことども。乙「御眞實でござるか。甲「弓矢八幡たすくるぞ。乙「ヤレ〳〵嬉しいや、ざつと濟んだ。甲「扨て太郎冠者、其方は禪定のして、富士松を持ち歸つたと聞いたが證か。乙「いや左樣あことはござりませぬ。甲「いや物を包まぬ人に聞いた、是非見せておくりやれ。乙「爾ふあれば、こう出させられ、さらく〳〵すおはち是が富士松で御座る。甲「まことに見事ゐ松じや、何と太郎冠者此松を身共にくれぬか。乙「ヤー是はおゆるされて下さりませ、やーこゝ

に富士の神酒がございますが、一つ上りませぬか。　甲「おに富士の神酒がある、是は一段じや急いで持て。　乙「心得ました、さあ一つ上りませ」と。扇子にて酒つぐ眞似ありて。　甲「どれ〳〵」と呑んで。　甲「おか〳〵好い酒じや、今一つ重ねやう。　乙「心得ました」と酒をつぐ。　甲「つぎ目でござる、暫らく待せられ」と。はしがゝりへ行き、樂屋へ向ひ。　乙「やい〳〵たのふた人が、今少し酒を呑ふとおしやる、急いで持て、おに酒が無くば身がかわらけ色の袷を代おして、求めて參れや、あゝさあ上りませ」と。酒をつぐ。　甲「どれ〳〵扨て〳〵好い酒じや、扨て聞けば其方は、附合をすると聞いたが、まことか。　乙「やー左樣おことが御座りませぬ。　甲「いや〳〵是も物をかくさぬ人に聞いた、何とそれがしが題を出すに依て

附けてお見やれ。　甲「こゝろ得ました。　甲「斯ふは何とあろふ、手に持る、かわらけ色の古あわせ。　乙「やあ暫らく待せられ」と。又はしがゝりへ行き、樂屋にむかい。　乙「やれ〳〵勝手で物を高聲に云ふお、早やたのふた人の句におされたやい、ゑゝ、何とやら仰せでござりました。　甲「手に持てるかわらけ色の古あわせ。　乙「酒事にあるつぎ目ありけり。　甲「酒事に。　乙「つぎめとは」と。兩人顔見合せて笑ふ。　甲「やー一段とよう出來た、偖ていかう喰べ醉ふた此いきほひに、山王權現に參詣せふと思ふが何とあろふ。　乙「是は一段と好ふござりませふ。　甲「汝ぢは供をせい。　乙「こゝろ得ました。　甲「道久も附合をして、若し其方負けたれば、あの富士松は身共の方へ、取るに依つて爾うおもへ。　乙「夫れは迷惑に存じまする

甲「さあ〳〵來い〳〵。　乙「何とぞ附合に勝ちたいものぢや。　甲「負けぬよふに致したい物でござる、しか〳〵。　甲「あとある物に暫し止まれ」。　太郎冠者太鼓座へすわる。　甲「あとある物に暫し止まれ、やい〳〵汝ぢは何を致してゐる。　乙「あとある物よ暫し止まれと仰せでござるに依つて、跡に控へおりまする。　甲「これは如何あこと、是が最早や附合じやわい。　乙「夫れが最早附合でござるか、爾ふあれば斯ふは何とござります、二人とも渡れば沈む浮橋の、跡あるものよ暫し止まれ。　甲「一段とよう出來た、さあ〳〵來い〳〵　乙「しか〳〵。　甲「黒き物こそ三つ並びけり。　乙「中が子て右と左りが親がしす、黒い物が三つあらびけり。　甲「黄ある中にも白き色あり。　乙「菜種咲くあいだ〳〵に大根花、黄ある中にも白き色あり

甲「赤き上にも黒いものあり。　乙「毛せんの上に子供のつぶ廻し、赤き上にも黒きものあり。　甲「一段と能ふ出來た、さあ〳〵來い來い。　乙「しか〳〵。　甲「長しみぢかし丸し四角し。　甲「丸し四角し長しまたぐる箱つるべ、長しみぢかし丸し四角し。　乙「筒井筒くるみじかし。　乙「大小のつばは四つ目のすかし彫、丸し四角し長しみじかし。　甲「四角し丸しみじかし長し。　乙「これは同じ樣なお題でござりますあ。　甲「是は難題じや。　乙「はあ、丸盆へ豆腐を買ひに行くちんば、四角し丸しみじかし長し」と。仕方をする。　甲「やい〳〵附合に仕方はあらぬ、仕方をすれば松は此方へ取るぞ。　乙「心得ました、仕方をせぬやうに致します、しか〳〵。　甲「上へもかた〳〵下もかた〳〵。　乙「三日月の水にうつろふ影見れば、上へもか

た〳〵下もかた〳〵。　甲「大きお物を腰にぶら〳〵」。　乙「印籠の蒔書にかきし富士の山、大きお物を腰にぶら〳〵」と。又仕方をする

甲「やい〳〵、又た仕方を致す、松は身共が取るぞや、何かと云ふ内に山王のお前じや」と。宜しく神楽ばやしにおる。　甲「先づ拜をしやう、汝ちも拜をいたせ。　乙「難有ふぞんじます」と。乙の太郎冠者、何遍もかしわ手を打つ。　甲「やい〳〵、汝ち何を致しておる。　乙「かしわ手を打つて居りまする。　甲「是れは如何あること、かしわ手と申すものは二つにきまつた物じや。　乙「夫れは存じて居りまするおれども、又た斯樣お宜い御供もござりますまいと存じ、當年中のかしわ手を一時に打つて置きます。　甲「やあ夫れは戯事、この鳥居で一句もつて參ろ。　乙「一段と好ふござりませう。　甲「山王の

前の鳥居も朱に塗りて。　乙「赤きは猿の面ぞおかしき。　甲「あさり居ろふ僧くい奴、身共が呑まふとも云はぬ酒を富士の神酒じやと云ふて呑しておいて、アノ猿の面によふ似たと云ふか。　乙「いや左樣では御座りませぬ、あなたのお顔が猿に似たと申すのでは御座りませぬ、猿奴の顔があなたに似たと申すことでござる。　甲「夫れは同じことじやわい、偖て富士松は是非とも身共にくれ。　乙「いや彼の松一と木差しあぐるは易けれども、あの松を差し上げますと、あなた樣のお顔は元より、惣身まで眞赤にありまする。　甲「ムウ、夫れは何故じや。　乙「昔しより申します通り。　甲「何と。　乙「主に松やれば（朱に交われば）赤ふなるでござります。

縞の財布

コシラヘ『忠臣蔵五段目山崎街道にて、定九郎と與市兵衛のこしらへにて與市兵衛の懐中には豆を入れたる財布を持つて出る。

與市兵衛の出。與市「おむあみだ佛〳〵」と。とぼ〳〵と出るうしろより、定九郎の出。定九「おゝい〳〵」と呼んで、歌舞伎にて定九カブキ「おゝい親爺どん、最前から呼んで居るに、お主の耳へは這入らねへのか。與市ポケ「へイ聞へちや居ましたが、戻れば例の紋切形、私しは生命が惜うございますから。定九ポケ「おーに今時の定九郎は、そんな野暮な荒療治をしないから、まあ一寸これを貸しねへ」と。無理に與市兵衛の懐中に手をさし入れて、財布を取り上げ。定九カブキ「フヽン

久し振りでの五十兩」と。財布の中を檢ためて見てびつくり。定九ポケ「おや〳〵是りや金でおふて、豆が這入つてるじやねへか。與市ポケ「へイ〳〵兎角浮世は。オチ「豆（壯健）おが金でございます。

座敷の水練

コシラヘ『甲は曲者、黑裝束にて覆面、蒔繪の吸物椀を持て出る、乙は家老のこしらへにて、吸物椀の蓋を持つて出る。

甲カブキ「奥座敷へ忍び入り、まんまと味好ふすましてやつた蒔繪の

「一椀」と。懐中より吸物椀を取り出し。甲カブキ「堅地（忝じけ）でおいと押し頂き。甲カブキ「幸い外へこぼれぬ内、あんじやう咽喉へ入れおば、褒美の酒は呑み次第、ハテ吸物（好い物）が手に入つたおあ」。この時乙の出、吸物椀の蓋を持つて、手裏剣を打つ見得にて。乙カブキ「やあッ、何かいやしい彼の吸物（あやしい彼の曲者）うまそふお其一椀、此方へ渡して。オチ「蓋割て（くだはつて）了へ。

百人一首

景物『薪に釜敷。

先づ羽織を脱いで前に袖を通し、直衣の思ひ入れにて、薪を笏の見得に持ち、釜敷を冠り。ウメ「奥山に紅葉踏みわけ啼く鹿の、聲聞く

時ぞ。オチ「薪は釜敷（秋は悲しき）。

鮒大名

コシラヘ『甲は大名、乙は太郎冠者、丙は亭主。

甲「隠れもない大名、今日は一段の天氣あれば、何方へぞ遊山に出ようと存ずる、先のさものを呼び出そふ、やい〳〵のさ者おるかい。甲「はあゝ。甲「居たか。乙「御前に。乙「念のふ早かつた、汝ち呼び出すこと別儀でない、今日は一段の天氣じや故、何方へぞ遊山に出よふと思ふが、何とあろふ。乙「夫は一段と好ふござりませう。甲「何處が好ろふぞ。乙「何方が好ふござりませうぞ、イヤ私くしが知己の方に、宮城野の萩がござ

りまするが、是は何と御座りませふ。　甲「夫れは一段とよかろふ、夫へ出よふ。　乙「いや夫へお越をかけられますと、亭主が御當座を願ひます。　甲「當座とは。　乙「歌のことでござる。　甲「いや其歌とやら留座とやら、身どもは知らぬことじや。　乙「是れは如何おこと爾ふあれば教へたれば、覺へるであろふ。　乙「爾うあれば、私しの友達が讀みました、萩の歌がござる、夫を教へてあげませう、七重八重九重とこそ思ひしに、十重咲き出る萩の花かおで御座る。　甲「それは誰が云ふぞ。　乙「誰がと申して、こおた樣が。　甲「あのそれがし一人して、おか〳〵、やい〳〵、其樣お長いことは、五年や三年の稽古で、覺へることでおいわい。　乙「是はまた如何おこと、左樣あれば物によそへたれば、何とでござる。　甲「いづれ物によそへたれば、覺へるであろふ。　乙「左樣あれば、この扇子の骨が十本ござる、七重八重で七本八本と見せまする、九重で九本、十重咲きいづるでバラリ十本でござる。　甲「はあゝ夫れで好いか。　乙「いや萩の花かおでござる。　甲「夫れがもう云へぬ。　乙「や、夫れおれば常々私しをお叱りおさる時、己れすねいはぎを伸べおつてと仰せらるゝ憚りおがら私しの向ふ脛と鼻の先を教へたれば、萩の花かなでござる。　甲「いや覺へた〳〵。　乙「左樣あらば出させられ。　甲「さあさあ往ふ、來い〳〵。　乙「はあ。　甲「今日は汝ぢのかげで好いおくさみをする事じや。　乙「亭主の自慢の庭でござる、隨分譽めておやりおされませ。　甲「こゝろ得た〳〵。　乙「やあ何かと申すうちに、早や是れでござる、暫らく是れに待せられ。　甲「こゝろ得た。　乙「も

のも、案内も」。こゝにて亭主の丙出る。　丙「表に案内がある、案内は誰だ。　乙「私しでござる。　丙「ゐい、汝ちあれば案内及ぼうか、すつと通りはおしやらいで。　乙「いや、今日は私しのたのふだ人、此方の萩が見たいと仰せらるゝに依て、御供いたして御座る。　丙「夫れは折角のお越しおれども、此頃は如何ゐ不掃除やよつて、宜しく斷りを云ふておゝりやれ。　乙「其儀は少しも苦しうござらぬ、早や御門前まで御出掛で御座る。　丙「左樣あれば是へ御通し申せ　乙「こゝろ得ました、是へ通れと申しまする。　甲「通つても苦しうおいか、やあ、話しの庭は是れか。　乙「左樣でござる。　甲「廣い宜い庭じやゐあ。　乙「左樣でござる。　甲「廣い能い庭がようかびたゐあ、　乙「あゝもふし〳〵庭はさびたと申しまするぞ、亭主が笑ひまする

甲「こゝろ得た、さびた好い庭じや、ゆるりと見やう、床几を持て　乙「はあゝ」と。甲の大名中央へ腰をかける。　乙「彼れに居るが亭主でござる、お言葉をかけさせられ。　甲「ムツ、あれに居るが亭主か、いや何亭主、此方は好い庭をお持やつた。　丙「見苦しきところへお越をかけられ、お恥かしう存じます。　甲「いや〳〵見事じや、扱てあの向方の古木は何の木でござる。　丙「あれは白梅でござる。　甲「あに百ゐりでござるか。　乙「これ〳〵もふし、白い梅の白梅でござる。　甲「はあゝ白い梅を白梅と云ふか、ゐか〳〵好い氣じや、この前にある大石は、何石でござる。　丙「是れは海石でござる　甲「さあ扱て見事なことで御座る。　丙「ありがたふ御座る。　甲「やい太郎冠者、この海石も斯ふして置ふより打割て、火打いしに。　乙「あ

ふもふし其樣おこと仰せらるゝと、亭主が腹を立てますじやお　甲「おーに亭主が腹を立てる、扨て此前おる一面に白いは何でござる。

丙「これは備後砂でござる。　甲「何、びんぼう砂。　乙「あゝ是れもふし、白い砂を備後砂と申します。　甲「白い砂を備後砂と申すか、おかゝ見事じや、して向方に眞赤に見ゆるは何でござる。　丙「あれが宮城野の萩でござる。　甲「はあゝ、彼れが名高い宮城野の萩で御座るか、太郎冠者きれいお事じやおあ。　乙「左樣でござる。　甲「あの赤い萩が白い砂の上へ、ぱつゝと散つたを物に見たてた　乙「何とで御座る。　甲「しつかい赤飯の蒸たて。　乙「もふしゝ亭主が笑ひます。　甲「おーに亭主が笑ふか。　乙「いや御亭主、たのだ人は戯ごとを申されます、氣にさへて下さるお。　丙「なかゝ氣にさへることで御座らぬ、偖て何れも是れへお越しかけらるゝと御當座を願ひます、殿樣へも願ふておくりやれ。　乙「こゝろ得た、いや申しまする、亭主が御當座を願ひます。　甲「當座とは。　乙「歌でござる　甲「おーに歌か、これものじやおあ。　乙「左樣でムる。　甲「おに亭主、それがしに歌を詠でござるか。　甲「おかゝ。それがしは日本一の歌讀名人で御座る。　丙「夫はよろこばしい事でござる。　甲「彼の花にて歌詠みましやうお」と。この時太郎冠者扇子を見せる　甲「七本八本でござる。　乙「もうし違ひます。　甲「おに違ふたか」と。小聲で太郎冠者は。　乙「七重八重で御座る。　甲「こゝろ得た、亭主今の歌はちと違ひました。　丙「はあ何とでござる。　甲「七重八重で御座る。　丙「初めの五文字は面白いことで御座る、跡は何とでござ

る」。太郎冠者又た扇子を見せる。甲「跡ほど面白ふござる、今度は九本でござる　乙「もふし又た違ひまする。甲「はあ又た違ふたか。乙「九重とこそで御座る」と小聲で云ふ。甲「亭主又た違ひました。丙「又た違ひましたか何とで御座る。甲「九重とこそ思ひしにで御座る。丙「是れも面白いことで御座る、して跡の句は何とでござる。甲「跡お跡ほどだん〳〵面白ふござる」と。太郎冠者皆

お扇子をひろげて見せる。甲「ばらり十本」と云ふ。太郎冠者小聲にて。乙「あゝ又た違ひます、十重咲きいづるで御座る。甲「はあ又た違つたか、いや亭主度々違ふて面目ないが、又た違ひました。丙「はあ又た違ひましたか、して何とで御座る。乙「あの樣な人には恥をあたへるが宜い」と。太郎冠者樂屋へ這入る。甲「この度は十重咲きいづるで御座る。丙「これも好ふござる、然し先程よりの歌が、たび〳〵違ひましたに依つて、始めより吟じて見ませう。七重八重。丙「夫れ〳〵。甲「九重とこそ思ひしに。甲「後ほどだん〳〵面白ふござる。太郎冠者はどれへ往きおつたか知らぬ」と。いろ〳〵冠者を尋ねる事あり。丙「もふし〳〵歌の跡は、何とで御座る。甲「その歌の跡には太郎冠者が入ります。丙「歌の跡に太者冠

郎が入りませぬ、早ふ跡を云はせられ。　甲「跡は十重咲き出づるで、御座る。　丙「夫では歌の文字が足りませぬ。　甲「あーに文字が足らぬ、足らずば十重咲きいづる〳〵と、足るまで云ふていたれば好い。　丙「是れは如何ゐ事、夫れでは歌が短ふござる。　甲「何か、歌が短かい、みじかくば十重咲きいづるう……と、長く引ばつて御座るがよい。　丙「さては此方さまには、歌のわけを御存じゐいと見へる。　甲「實はそれがしは歌とやらのたとやらは、知らぬ事でござる。　丙「惣じて歌と申すものは、三十一文字と申して、三十一字にきまつた物でござる。　甲「難かしい物でござるの。　丙「さいわい、それがしの奥が讀んだ歌がござる、それを此方に見せませう」と。亭主短冊を渡す。　甲「はあん是れが三十一字の歌でござるか、どれ

〳〵一寸吟じて見よう、さゐきだに重きが上のつまかさね、我がつまゐらでつまゐ重ねぞ、是れは如何やら開いたやうゐ歌でござる。　丙「左樣でござる。　甲「今一度吟じませう」と。忠臣藏師直の假聲にゐる。　甲「さゐきだに重きが上の小夜ごろも、我つまゐらぬつまゐ重ねぞ、こりやこれ新古今の歌、この古歌に點作とは、ムウ、いや何、この歌定めし御覽じたであわふ」。亭主も判官の思ひ入れありて。　丙「たゞ今見ました。　甲「あの手前が讀むのを。　丙「はあつ。　甲「いやお手前の奥方は貞女〳〵、手跡と申し御器量と云ひ、御自慢ゐされ、是れでは登城の遲ゐわる筈のことじやわ。　丙「こは師直公には御酒まゐつたゐ、御酒機嫌で御座りますゐ。　甲「いつ盛しやつた、いつ喰べました、御酒たべても喰べいでも、勤むることは屹

度勤むる、貴殿こそ酒呑んだの、奥方の側にへばり附いて御座つたか、惣じて貴殿のように内にばかりへばり付いて居る人を、井の内の鮒だと云ふたとへがある、後學のにおることじや、聞いておかつせい、彼の鮒と云ふやつ、何か二尺か三尺の小さな井の内を、天にも地にも無いところじやと住んで居るところが、非戸替の釣瓶にかゝつて上ります、丁度みどものやうな、慈悲深い者に可愛さうだと大川へ放しやる、何が今まで小さな所に居たものじやから、度をうしなひ、彼方ではぴりゝ、此方ではぴりゝ、遂には橋杭などで鼻ばしらを打て、ぴり〳〵だ、丁度貴殿もその鮒と同じこと、内にばかり御座るものじやから、此樣な大廣間へ出るが最期、うろたへて度を失ひ、柱などで鼻はしらを打つてびし〳〵だ、思ひなしか、お顔

が鮒に似て參つたやうだ、鮒が上下で登城は今が見はじめだ、鮒よ〳〵鮒だ〳〵鮒ざむらひだ。　丙「こは師直どのには狂氣めさつたノ氣が違ふたか武藏守。　甲「いや此奴、執頭第一の高師直、氣が違つたとは何のたわ事。　丙「すりや最前よりの惡口な、本性よな。　甲「本性なれば汝あ何とする。　丙「本性なれば斯ふ」と。一刀拔いてかゝる見得。　甲「殿中だ。　丙「はあゝ」と。この内好みの思ひ入れいろ〳〵ある。　甲「いや判官どの、爾うちいさを捻くり廻し、この師直を切る氣であろふ、さあ切つせへ、肩から切るか、腰から切るか早く切れ〳〵切つせい」と。見得よろしくある、この時樂屋より「配膳」と云ふ。　甲「最早や配膳の刻限、呆氣にかゝつて余程の暇入り、どりや參ろふかい。　丙「いや暫らく。　甲「何ぞ用か。　丙「

何卒今日配膳のおさしづを。　甲「知りませぬ、存じませぬ。　丙「すゥや何故のお腹立。　甲「さきだに重きが上の小夜ころも」と。短冊を取つて。　甲「この歌ゆへだ。　丙「すりや此歌ゆへに。　甲「合点がいたか。　丙「師直（物もう）」と云ふと。　甲ポケ「どうれ。　丙ポケ「何事でござる。　甲ポケ「今こなたが物もふと仰有つたに依て、どうれと申した事でござる。　丙ポケ「ハア、これは昔しより云ふ通り、とんだオチ「師直（物の）間違ひで御座つた。

山科飛脚

コシラヘ『忠臣藏祇園一力の場にて、甲は大星由良之助のこしらへ、乙は町飛脚の扮裝。

甲カブキ「あゝこれ〳〵鳥渡往て來る其あいだ、懸物をしかへて、あゝそれ〳〵三味線を踏み折るなあ。世話のやける奴じやわい」と。是より口淨瑠璃になる。甲上ル「月の入る山科よりは一里半」と。樂屋より此文句の跡を引き取つて、乙の飛脚が。乙上ル「息をきつたる嬪子力彌」と上るりの切目よろしく、ばた〳〵にて駈て出て。　乙「祇園町の一力と云ふは、此處か知らん、力彌さんが風邪ひいて困るからと云しやつたで、今日俺が雇われて代理にやつて來たが、何でもかたなの鯉口をがちやりと、音さすが合圖じやと聽いて來たが、一つやつて見てやろ、こうか知らん」と。鯉口の音がちやりと音さすと。甲カブキ「鯉口の音ひゞかせしか、何ぞ火急の要事ばしあつてかゝ乙「へイ顏世さまたらから、急ぎの御狀でござります。　甲「ふーん

貴様は力彌じやないか。　乙「へイ力彌さんは風邪ひいて御座りましたので、私しや雇われて參りました町飛脚でございます。　甲「はあ左様かいな、そりや強い御苦勞であつた、はアよし〳〵、夜の明ぬうちに逃ひの駕を早ふ〳〵。　乙「はい〳〵畏まりました」と。其内に由良之助彼方へ往んとすると、あわてゝ飛脚は由良之助の袖を捕へて止め。　乙「あゝもふし旦那、萬望飛脚賃をおくれおさらぬか　甲「貴公は狀賃貰はずに來たのか。　乙「へイ左樣でございます。　甲「あらい目に會たな、こんな事おら小錢を殘けておけば可つたに、前刻奥で太鼓持や仲居に纏頭きれてやつたが、まだ有るか知らん、あれば頂上だにな」と。由良之助紙入を調べて見て。　甲「ある〳〵古河に水絶にずじや、そーれ飛脚賃だ。　乙「へゑ、有難ふございます、あゝもふし旦那、こりや二分かせいさい三分に足らぬくらゐの小玉じやありませんか、山科から祇園新地まで來て、是れくらゐでちつと釣り合ひませぬ。　甲「そりや合ぬが最とも、だ。　乙「へエン、そりや一体如何した譯でございます。　甲「世間で能く云ふやつさ。オチ「狀賃に露金（提灯に釣金）じやもの。

兩花道

コシラへ「甲不破と乙名古屋の思ひ入れにて、兩人とも笊を抱へて出る。

兩花道の出よろしくありて。　乙「黒豆鐵砲ウ。　甲「辻占お豆」と。兩人はボケにて進み出で、是より歌舞伎とおりゝ乙カヅキ「あ、夫へ行

くのは、稲妻の始まり見たか不破の關。甲カブキ「其伴左衛門であろふがあ。乙カブキ「左様云ふ其方は、雨の降る夜も風の夜も、通ひくるわの大門口

甲カブキ「唐傘にねぐら貸そふや濡れつばめ。乙カブキ「名古屋山三であろふがあ

甲カブキ「イヤ通さぬ。乙カブキ「イヤ通る

甲カブキ「鳥渡斯ふして。乙カブキ「何を小癪あ」と。両人よろしく見得あり、直にポケとあり。乙ポケ「何だいオイ是はつまらぬ。甲オチ「莢豆(鞘豆)をしたと云ふのじやわい。

瓢箪踊

コシラヘ『両人共好みの拵へにて、甲は亭主、乙は客人。酒席の小道具を両人の間に並べありて、酒宴の体、思ひ入れ宜しくありて。乙「御亭主、大きに御馳走さまで御座います。甲「いやもう何にも御座いませんが、然しさかはは無ふても兎角酒は、相手次第で御座います。乙「左様さ、何分人がさかあで御座います。甲「阿呆らしい、大江山の酒呑童子じやあるまいし。乙「あはゝゝゝゝ時に今度の中座の林中の常盤津は、一段の聴物と云ふことで御座いますあ。甲「大体常盤津あんぞは、關東の人の咽喉に限りますあ、關西は又た淨瑠理に聲が合ふと同じことで御座いませう。乙「常盤

津は大變自出度いものに違ひありませんお。　甲「何故でございます云ふてあるじや御座いませんか。　甲「あはゝゝゝ之は恐れ入りましたお、而し今度當地へ來て居る林中と云ふ人は、この頃風邪を引いて困つて居ると云ふことですお。　乙「へゑん、私しは知りませんな。　甲「夫れでも昔しから云つてもじやありませんか、林中に聲をからす（酒を燗す）と申します。　乙「これはかたき打でございますか、恐れ入谷の鬼子母神。　甲「岸野の里へはもう一里。　乙「一里二里あら小舟で通ふ。　甲「通ひくるわの大門這入ればたちまち極樂淨土。　乙「これはつい浮れて、ペラ〳〵と。　甲「いや斯したところは極樂淨土でござります。　乙「時に大變喰べて酔ひました、もうお終盃にいたしませう。　甲「先づこの德利のおいところまでゝ、お終盃ひと致しませう。　乙「左樣いたしませう、時に酒は氣を浮すと申しますと通り、ゑろふ面白おつて氣が浮いて參りました、何と一つ小唄でも歌ふては如何でございます。　甲「夫れは面白い、當今流行つておる、赤いもので云ふあらと云ふ、唄に致しませふか」と。是より甲は燗德利の空を叩き、乙は小鉢を叩き調子を取つて、同音に唄ひ出す。ウタ「赤ひ物で云ふあら、官女のはかまに小豆めし、疱瘡見舞に神數丸、月に七日のお客さん、あーれ恥かしい顏の色、千代のよいわひに」と。こゝまでは節も違わずに歌ふて來たが、何とおく下の句より空也念佛の節に變つて來る。ウタ「ちとつむりか花客、夫は丹頂の鶴じやへ。　甲「これは〳〵面白い、是から踊り〳〵呑ふじやあ

るまいか。　乙「夫はよかろ〳〵」と。是れより兩人立あがり、空德利を叩きあがら踊る。兩人「のまふだ（あまいだ）〳〵〳〵」と、兩人よろしき所にて止り。　乙「これは思はず鉢叩き。　甲「空也生の。　オチ「ようたん（瓢箪）踊りをいたしたわい。

切子燈籠

コシラヘ「大塔の宮三段目、甲は長井右馬頭、乙は花園、丙は鶴千代長井右馬頭口淨瑠理にて出にある。上ル「立ち歸る、やかたの主人右馬頭、女房花園〳〵」と。爰にて花園の出になり。乙カブキ「我が夫には只今おさがり、して樣子は如何で御座ります。甲カブキ「今日上より仰せ出されしは、先だつて預かりの宮、首打つて渡せと、使者として齋藤太郎左衛門、おつゝけ來たるはづ、不便あれどもせがれ鶴千代を、宮の御身替りと、心を定めたる其期に至りて、未練なきやうとくと言付けめされ。　乙「そりや彼の鶴千代をば。　甲「何かは右馬頭のこゝろにある、鶴千代〳〵。　丙「はあ」と。丙の鶴千代の出にある、甲乙の前に手をつかへる。　甲「幼おけれども能く聞けよ、宮さまの御身がわりに立つこと、家の面目、其身のほまれ。　乙「だん〳〵お世話にあつた宮樣の御恩德の爲め。　甲「お身代りにあつてたも。　丙「そんなら御恩德の爲めに。　乙「御恩德の爲めに」と。三人手を引き合ひ、宜しく愁ひの見得ありて。　丙「ごおんとくの」と是よりおんごくあはゝの歌の節にある。　甲「おんごくなはい。　乙「あはゝやおんごくあさよい〳〵。　甲「宮の御身がわり、」鶴千代が首

討つて渡すのうはや、武士の意氣地が立てたさじや、ありやこりやりや、さあさ、よいやさ〳〵。　乙「私が思ふよに浮世があらば、こんな好い子を双子に生んで、一人の子は御用に立て、獨り殘して跡取りとして、ありやこりや、よいやさ。　丙「とても云ふても返らぬことじや、そんな涙をしゞみ川へ流し。夫れが私しのたあむうけみつ。　甲「夫れがそなたの手あむうけ水、ありやりや、こりやりや、さあさよいやさ。乙カブキ「如何思ふても此子は殺しはせぬ、この母が身代りに立つわいな。　丙「いる私しが。　乙「いやわしが。　甲「これ〳〵花園、是非とも悴を討ねばならぬ。　乙「すりや何でも鶴千代をオチ「い、そなたに母は（脊中に腹は）變られぬ。

妹山脊山

コシラヘ「甲は古道具屋の見得にて、宜しく好みの扮裝あるべし、乙は公家の思ひ入にて、手に連木を持ち、天窓に金碗を冠り、宜しく滑稽げたる見得あるべし、甲乙一つの鍋釜を持つて居る。

甲「やれ〳〵道具屋と云ふ商賣は、何じやこて〳〵とした商賣であるわい、いやもう何の稼業におろかは無いわい、然し用が多いに困りますが、この鍋釜を誰か買ふてはくれぬかいな、イヤ買人が無ふても釜わぬ（構わぬ）、鍋（誰）あと來るだろふ」と。宜しく摩臺詞あるところへ、乙の公家のそ〳〵と勿体らしく出にあり。　乙「あゝこりや道具屋。　甲「へイ〳〵お出あされませ。　乙「その釜、麻呂が求

めるであろふ。　甲「へイ〳〵、これは難有ふござります、然しあなたは是が御入用で御座りますか。　乙「如何にも麿が入用じやから、求女（求め）やう、子太郎（直段）は何程じや。　甲「へイ、貴公も入鹿（入用か）してお求めあさるんですが直段は定家（たしか）に分りません。　乙「おーる程、直段が分らねば大判事（大事）あいがこの釜を御殿へけんじやう太郎（献上無價）に差上げたら宜かふぞ

甲「滅相か、無代取られてどおいあるもので。　乙「然し此の鍋釜は芝六や杉松で焚いても大事あいが。　甲「夫れは介意ひませんが、貴公は夫れを無代取るとは、はあん鍋ごり（鍋島）公家と申しますのか　乙「いや麿は藤原の。　カケ「釜ごり（鎌足）じや。

人相見

コシラヘ「甲は病人、乙は人相見、何れも好みの扮装。

甲は杖をついて幕明歌にて出る。　甲「私も長々の病氣で、とんとお醫者の藥も呑みあいたゆゑ、妙見さまへ御願を申したら、御蔭でちつと好ふなつたら、信心が怠たつて、精進はせずに酒は呑むし、題目法花（皆目ほつとけ）にして、ちつとも參詣せぬゆゑ、又た元の

通りに惡ふあつた、是は私が大きな妙見（量見）違ひをした、今更南無妙（おんぼ）云ふても、後悔は後へもどらぬ、其代りに病氣は後もどりで困つて居るわい」と。宜しく捨臺詞のところへ、乙の人相見天蓋を冠て、出になる。　乙「人相家相手の筋の考へ。　甲「おゝさいわひ人相見が來た、一つ見てもらふ、もふし〳〵お頼み申します。　乙「はい〳〵何を見るのじやあ。　甲「私しはあ、去年の秋から病氣で藥劑もいろ〳〵飲みましたが、とんと利きません、此頃では手が痛ふて動けんやうにありました、一体何の病氣か見て下さりませ。　乙「はあ左樣か、どれ〳〵見て進ぜませう」と。宜しく人相を見て、其人の顔の道具にて、いろ〳〵面白おかしく云ふ事あつて。　乙「是れは病氣じや、病氣ゆゑに身体が悪い、だから病氣じや　甲「

あーる程、病氣に違ひございません。　乙「去年の秋から惡ふて、くすりも色々呑むだが、併しこの頃では手が痛ふて動かぬと見へるあ　甲「あーる程、これ〳〵そりや今私が云ひました通りじや。　乙「何と能ふ合ふがあ。　甲「まことに奇妙で御座ります。　乙「此病氣は、生命さへあれば死ぬる氣支はあい、又た病氣さへ治れば、身体は達者にあると云ふ人相じや。　甲「とんと其通り、よう合ひます。　乙「ついでに脈を見て進ぜよう」と。宜しく脈を見る思ひ入れありて。　乙「フウ〳〵〳〵」と。考へる体にて、手を握り尺八を吹くやうにする、病人は手が痛いと云ふ思ひ入れ。　甲「ア、いたい、もふし〳〵如何あさるんです。　乙「フム〳〵〳〵」と。猶も尺八の譜を宜しく口にて云ひながら病人の手を尺八にして、頻りに吹く。

甲「エ、痛い〳〵。オチ「御無用。

鐵砲豆

コシラヘ「大安寺の春藤次郎左衛門の家來、甲は奴伊平、乙は仝じく伊平何れも好みの扮装。

甲「どりや是からお旦那に逢ひたい物じやが、夫は爾ふと此やつこでも、今では見る影も無い、糟やつこあれども、元は春藤次郎左衛門様の家來にて、やつこの伊平と云ふて、人に知られた男あれども今では拍子木叩いて、ありや〳〵〳〵よいやせも、久しい物じや、夫は爾ふと此佐平奴は何處に如何しておるであろ」と。この時乙の佐平出にあり。乙「あゝ俺も春藤次郎左衛門様の家來、佐平様とも

云はれた身が、今は見る影も無い一文やつこ。甲「あゝ爾ふ聲は佐平じやあいか。乙「わりや伊平じやあいか、汝も已も先づは健固で頂上〳〵。甲「いや頂上より身上も下り阪で、やつこ（いこう）やくたいじや。乙「何を馬鹿らしい、そんな詰らぬ事を云はずに、俺が名の佐平（酒）でも呑んで、浮き〳〵するが好い。甲「いや此奴は面白くやりかけたな、然し汝もまめで好いな。乙「俺よりは貴様もまめで好いじやあいか。甲「ほんに左様じや、俺は物事に苦勞をするから、其處で苦勞まめ（黑豆）と云ふのじや。乙「又た貴様嘘を吐くぜ、大方其くろふまめも鐵砲まめだろ。甲「汝もまめあら、俺もまめで、こりや。オチ「佐平まめ伊平まめ（茨豆湯出豆）と云ふのか。

四季の花

コシラヘ「甲は亭主、乙は仲人、兩人とも好みのこしらへ、丙は女のこしらへにて、團扇と炬燵を持つて出る。

乙「エ、今日は、實は男やめにぼろそが出るたとへ、そこ許に嫁さんのお世話をしたいと思ふて、かねゝ心掛けておつたところ、丁度頃合の嫁さんを見付つたんで、御周旋いたそふと存じと參つたが、お貰ひにはありませんか。 甲「いやもう、毎々御親切にお世話下さりまして、何分滯にみじかしたすきに長し、とんと思はしい嫁を見つからませんで、困つておりました。 乙「縁と云ふものは人間業では不可ぬものです、然し今度お世話致そうと存ずる嫁さんは、

荷物とては別段にありませんが、先づ夏冬一通りのものだけはありますんで。 甲「いやもう夏冬一通りの道具さへあれば、其上は御座りません、何卒お世話を願ひます。 乙「承知いたしました」と。烏渡這入つて丙のを女連れて來る。 乙「へゝこれが花嫁さんで御座ります。 丙「何分ともに宜しく。 甲「へゝ夏冬の道具が揃ふてあると仰有つたは。 乙「ハイ此團扇と炬燵でございます。 オチ「夏は團扇冬は炬燵でございます。

寵万歳

コシラヘ「甲は万歳、乙は亭主。

甲ウタ「昆布わかめ、田作さいらとにしん鮭あわび、干ます大根あ

いちつく鰐、かつは節たきたらたあべる朝の雑煮。　乙「これ〳〵万歳どの、最前から聞いて居れば、いやし坊ばつかり云ふてじや、こりや此方は大和万歳で無ふて。　甲「アハ、、、、誠はかまど万歳の。オチ「くわせものでございます。

涙の音

コシラヘ『千本櫻御殿場』にて、甲は静御前、乙は忠信。

浄瑠理にて出。甲上ル「しづかは君の仰せを受け」と。静つゝみを持ち出で。甲上ル「手に取上げて引むすぶ、手品もゆうに打ならす」とつゝみを打つ。乙上ル「斯くやと思ふ春かぜに、さそわれ來たる佐藤忠信」と。乙の忠信の出にあり。乙上ル「静の前に兩手をつき、音に、

聞きそれし其風情」と。忠信つゝみに聞き入る体。甲上ル「折よしと鼓を止め、油断を見すまし切りつくる」と。静かたおを投いて切りつくると、忠信は止めて。乙カブキ「こは何とおさるゝお。甲カブキ「やあ贋忠信、さあ白状、仰せを受けた静がせんぎ、云はずは斯ふ〳〵斯ふ」とつゝみでたゝく。甲カブキ「さあ白状。甲上ル「と詰め寄れば。乙上ル「一句一答言葉あく、只ひれ伏して居たりしが、うや〳〵し

くつゝみを上げ、しづかの前に直しおき」と。忠信つゝみを靜のまへに置き、是より鼻くた聲にてせりふを云ふ。乙カブキ「人にはかさぬ身のふへあれども申しはぐる、初はほれある初音のつゝみ、ほの皷のほどほざります、疳癪と氣腫のほんおきつね、ほとこ狐、ほの狐の生皮をもつて、ほしらへたるほのつゝみ、私しはほのつゝみのほで御座ります。甲カブキ「ム、此つゝみの子じやと云やるからは。乙「私しの鼻聲。甲「さて和郎は。オナ「瘡毒(狐)じやの。

國の鼠

コシラヘ『曲者の姿、黑裝束の忍ひ、黑塗の箱を脇にかゝへ出で。

カブキ「まんまと首尾克ふ寶藏へ忍び入り、うばひ取つたる小倉の色紙、伯父御彈正樣へわたせば、褒美の金は望み次第かたじけない」と頂き。カブキ「然し小倉の色紙か一寸あらためて見やう」と。箱をあけ、内より本を出し、御文章の節にて讀む。ロミグセ「それ當國攝州ひがし成郡生玉の庄上大坂と云ふ在所は、往古より如何ある約束のありけるにや」と讀みてびつくり。ポケ「こりやお文さんじや、途方もない違ひじや、こんな物持ていんだら、あわて者の文章(向ふ)見ずじやと笑われるわい、もう一遍盜み直して來ふ」と這入り、又た箱を持ち出て。カブキ「まんまと首尾よふ奪ひ取つたる小倉の色紙かたじけない。ポケ「然しちよつと檢ためて見よふ、先の樣に間違ふとすかじや」と。箱をあけ本を出し、前のごとく讀む。ロミグセ「上人一流の御歡化のおもむきは、信心を以て本とせられ候、その故はも

ろ〳〵の雜行雜修のこゝろを振すて丶。ポケ「又間違ふてゐる、もう一ぺん取りおほして來ふ」と。這入り又た箱を持いで。カブキ「まんまと首尾よふ、今度こそほんまの小倉の色紙かたじけおい。ポケ「併し念のため鳥度あらためて見よふ」と。本を出し、前の通り。クセ「夫れ人間の浮生ある相をつら〳〵觀ずるに、およそほかおき物は、この世の始中終まぼろしの如く。ポケ「又た違ふた、此ように何べんも〳〵麁相するとは、我身おがらも阿呆らしうて、一向あきれて。カブキ「門徒(物)が云われぬ。

曾我物語

景物「玩弄箱、内に三寶、さかづき、十のう、火吹竹、打盤、横槌、

にしき繪の面五六枚、そば屋の荷、銅の鍋、たんぽ、小桝、張子の犬、神酒徳利、渡邊の綱のにしき繪、將棋の駒、附木のこま、菜刀庖丁、ふご舟、鏡臺、合せかゞみ、張子のかつを、鳥笛、撥、桶、何れも小供の手遊び物に限る。

口上「偖て曾我の對面場で、景物には手遊箱を差しあげます、工藤左衛門祐經は、舞臺の中央、臺の上にてんと座つております」と。手遊箱より、三寶と酒盃を上せたるを出し。口上「祐經は頼朝公の、鶴ケ岡八幡宮へ臺盞(代參)で御座ります」と。酒盃を指さし、次に十のう、火吹竹を見せて。口上「是れは近江小藤太、八幡三郎で御座います、この二人は籠(工藤)の傍を何時も離れませぬ、大磯の遊君虎御前、化粧坂の小將は」と。打ばん横づちをウンと掛聲して、重

ふそうに兩手にて持ち出し、曾我兄弟が打こんでる重ひ物（愛妾）で御座ります、工藤の後方には諸士の面々が出て列んでます」とにしき繪の半面を、五六枚おらべまして、又た手遊びの蕎麥屋の荷を出し。口上「これは蕎麥屋荷（小林）の朝比奈で御座います、扨て是より曾我兄弟を呼び出し、いよ〳〵對面の場で御座ります」と。云ふをきつかけに對面場の鳴物を入れ、メリヤス三味線にて、假聲にて口上を云ふ。口上「どりや披露にかゝるべいか」と。銅の手鍋とたんばを持出し。口上「皆な細かいが（今小林が）取り出しにて、目通り出せし（致せし）二品銅物（二人の若者）煮たい〳〵（似たは〳〵）似たとは鍋に煮ました（誰に似ました）たんぼ自由に呑まれたる（萬夫不當と呼れたる）酒具の燗しよつけ易う（河津の三郎祐安）に、

何合（何）と」と。小桝を出し、又た半面二枚をもつて。口上「思ひ出せばおゝ夫れよ、子供半面二枚（頃は安元二年）、紙細工（神無月）道化あそびの（十日あまりの）事ありしが、形は（河津は）好みの（其日の）扮装に」と。張子の犬と竹笛を出し。口上「張子のぬつたる立犬に（秋野の摺つたる狩衣に）竹穴ざつと（竹笠ざつと）木枯に吹きそらし」と。三寶に神酒德利渡邊の綱のにしき繪も取り出し。口上「手に三寶の神酒（栴檀胴の弓）たづさへ、村雨月毛に武者繪のわたおべ（ゆらりと跨がり）」と將棋の駒の銀將と角行を出し口上「銀將角行（絶所惡所）のきらひあく、駒を早やめて歩行（歩行）」と。歩兵を出し、又た歩兵二つ附木の假駒を出し。口上「歩兵は附木（こわ祐經）か御ざんなれと、待ち設ふけたる二つの歩兵（二人

の郎黨)」と。打盤を出して。口上「打ばん丸いは(一のまぶしは)お内の御用さ(近江の小藤太)」と。菜刀庖丁を出して。口上「二のまぶしは菜刀(八幡)の三郎、よつびき兵と放つ矢が、槌(父)には」と横槌を出し。口上「あらで手鍋と笛桝(せがれの祐安)鞍の菜がおた(山形)いけづゝて、前へそばの荷を出したり(がばと射落したり)」にて。蕎麥の荷を出し、又た三寶とふご舟を出し。口上「三寶ふこうの船出す(万夫不當の祐安も)」と。紙鳶を出し。口上「退治のいか繪に(大事の痛手に)あかい繪圖(瑞り得ず)」と。角行の駒を出して。口上「龍馬(良馬)よりどつと落こちの」と。女の鏡臺に合せかゞみを出し。口上「おりしかゞみの蓋には鏡臺(消にし河津の二人の兄弟)」と。打盤を出して。口上「樫の打盤(兄の一滿)呈上(成長)

して」と。景物をお客に進上し、次にたんぼを出して。口上「つけ呑みたんぼ(祐信さま)御用意(養子)にて」と。十のうと三味線の撥を持出し。口上「傍の十のう附ばち(曾我の十郎祐成)」と。小供繪の箱を出して。口上「小供の箱を一つ出し(弟の箱王人さおり)」と。張子のかつをを出して。口上「東都産のるばし魚(北條さまのるばし子)にて」と。蕎麥屋の荷を出し。口上「蕎麥の御用軒賣り(曾我の五郎時致)」と。鏡臺を又た出して。口上「扨て鏡臺(兄弟)」と。撥と桶とを出して。口上「撥小桶(待ち設け)たる、この鳥笛(年月)」と鳥笛を見せ。口上「笛鳴り鳥笛(祐成時致)」と。ふごの船を出して。口上「ふごの提物浮船(工藤の左衛門祐經)。ハテ珍らしい」にて、半面を出し。オチ「半面(對面)じやあ。

花の酒

コシラヘ「甲乙とも書生の扮裝にて、瓢簞を提げて出る。

甲「おい〳〵、君はぶら〳〵と散歩かねへ。乙「おゝ君も出掛たのか、今日の好日曜をば薄闇い下宿樓上に閉居しておるも氣が利ぬから、飛び出したものゝ、嚢中皆無の体にて、目的地もあ

いのさ。甲「いや嚢中の慘狀は御同然だが、僕はこれ見たまへ、一瓢の酒を工面して來たから、どうだ君、向島へと出掛やうじやあいか。乙「それは賛成だ、一瓢の酒さへあれば氣が丈夫だからな。甲「爾うさ、さあ此酒を歩きながら飲み廻しとしやう」と。瓢簞から酒を呑んで。甲「おい君もやりたまへ。乙「おつと、感謝〳〵」と。乙も呑む。乙「あゝ何とも何へあい好い氣持にあつた、おい君見たまへ、向方に行く令嬢のうしろすがたの艶あるをさ、如何だ早く歩きたまへ、追付て美くしい顔を拜見しやうじやあいか。甲「これ〳〵そんな、暴あこと止めたまへ。乙「ハア、、、、これも酒の科だ、免してくれたまへ、これが。オチ「瓢簞から管（駒）が出たのだ。

尻ぬけ

コシラヘ『甲乙何れも好みの風にて、甲は雨傘を持て居る。

甲「これ〳〵お前さんは何方へ往きおさる。乙「へイ好いお天氣ですからぶら〳〵と。甲「もし鳥渡待つて貰ひませう。乙「待つたが何でおじやる」と。洒落かゝる。甲「おい洒落どころではおい、一体全体。乙「やあ難かしうおつて來た。甲「さあお前此あいだ俄雨に軒づたひに來て、難義したを覺へて居るか。乙「そりや知つて居る。甲「そんなら其時に何やら貸してあげたおあ」。乙はとぼけて。乙「何であつたいおあ。甲「それ是れを覺ねて居おさるか乙「そりや長町の名物でと。甲「ゑゝいま〳〵しい恩知らず奴。乙「や

あ詫まつた〳〵、わしも何やら用の多いからだ故、つい御無沙汰におつたんだ、免して下され。甲「免してくれも無いものだ、實に交際甲斐の無い人じや。乙「もつともおれども是しきの事にそおいにオチ「傘（嵩）かけて云はいでも宜い。

後生願ひ

コシラヘ『兩人とも老人好みの風、甲は杖ついて、乙は數珠を持つ。

甲「あゝ南無阿彌陀〳〵。乙「もし貴宅は今日はどつちへ甲「パイわたくしはお前さまと年も同じ位、もう〳〵芝居や遊山よりはお參詣が樂しみで出かけます。乙「おゝそれは〳〵結構な事、わたしも其通り、ほんにまあ年寄連のおはなしも合ひますゆへ、御一緒

に参じませう。甲「ハイ〳〵ぼつ〳〵参じませう。乙「おゝ車が危あふござります。甲「ハイ〳〵然し私しは鳥渡親類へ顔を出しますことが御座りますゆへ、失禮おがら一足おさきへ。乙「左様おらお別れ申します、いづれ向方で。オチ「御堂（二度）御目にかゝります。

手詰り

コシラヘ「手品の思ひ入れにて、銚子鍋を持つて出る。

口上「東西〳〵、此銚子の中にある酒を、この盞手もさへずに酒をかくして御覽に入れます、はあようきた」と。扇子であふぎ、種々の思ひ入ありて。口上「東西〳〵、此通り酒はしづくも御座りません」と。銚子の中をあらため見て。ポケ「やあまだこりや酒がある、一体

如何したのじや、こんな筈じやおいが、是では手妻をすると云ふた言ひ譯がおい、ろゝまゝよ、もう一遍やつて見い」と。また以前の如くして、中をあらためて見てもやつぱり酒がおくおつて無いポケ「やつぱり酒があるがな、あゝ難義やおあ、こりやわづかな。オチ「酒に手妻（金に手詰つた）つたと云ふのじや。

散らぬ花

コシラヘ『着流しにて、作肉を持つて出る。

ポケ「この平鉢に入れてある作り身は、わさびが能ふ利いてあるが、各々方もおあがりおされませんか、私くしも御相伴いたします」と一口ちよつと喰ふて。ポケ「あいた〳〵、あゝ鼻がいたい、こう〳〵

〳〵、あゝ好ふ利いてあるな、いや皆さん、そうけた〳〵わさび（笑ひ）おさるな、まことに鼻が轉宿しそうです、あゝ鼻の穴がうづき立てるわい、それ〳〵各々もおみだこぼれませう、パア、、、、おの〳〵困りの（小野の小町の）歌に。鼻の穴うづきにけりあいたづらに、わさび能う利くおかせせしまに、はあゝゝゝゝゝゝ併し一ついやし坊、ほうし、あいた〳〵〳〵、又た痛ふおつて來た、はあゝゝゝゝ、分つた。オチ「わさびつまんで二度の（我身つまんで人の）痛さを知れぢや。

かつら川

コシラヘ『頬かむりして朱のお椀と銚子鍋とを持つて出る、すべて帶

屋長右衛門の思ひ入れ。

カブキ「これお椀や（お半や）三こん跡は飯つゆも、芋汁（生命）の吸ひどころ（捨どころ）、一緒に吸ふと（死ふと）思へども、四十に近づく身をもつて、十四はいや其處等の小櫃めし（小娘）と、一所にくひたらず味知らずと思ふた故、お椀を負ふて來たものゝ。

ポク「よつぽど私は喰ひぬけじや、酒は呑むし、飯は喰ふし、そこでかつら川では無い、酔狂からと云ふのか、それじや信濃屋のお半では無ふて、朱塗屋のお椀で。オチ「わしも背中に、負ひや銚子もん（帶屋長衛門）じや。

劍の威德

コシラヘ『忍び曲者の風。
チ、、、チン〳〵の忍びの鳴物にて、宜しく寶藏を切りやぶり、ごーんと時刻の鐘にて。カブキ「寶藏へ忍び入り、まんまと奪ひ取つた る此名劍」と。宜しく臺詞あつて、右の足より踏み出さんとすれど も足地につき、離れぬ思ひ入れにて。ポケ「こりや如何した事じや、 もう一遍出直して見よ」と。又た寶藏の中へ這入りて、出直して又 た片足を踏み出し。カブキ「是れさへ典膳さまに差出せば」と言ひお から。以前と同じく、足が地を離れぬに困る思ひ入れありて。ポケ「 はて妙じやお、片方の足が如何しても出おい、もう一遍やり直しだ」 と。又たあらためて出直し。カブキ「典膳樣へ差出せば、此身の出世 は望み次第、ちゑつ」と。片足出おい思ひ入れに色々あつて。ポケ「

ゑゝやけくそだ。カブキ「此身の出世は望み次第。オチ「ちゑつ、片足 出おい（添じけおい）。

祝言

コシラヘ『袴羽織のこしらへ、紙に饅頭を六個つゝみ、盃にのせて持ち、樂屋にて小うたひを謠ふ。

ロトバ「三々九度の御さかづきも、首尾能ふ相濟み色直しの御さかづきも整

ひ、お目出たい事でございます、そうして此様に聟さまの方からおまんを三個下されたら、又た嫁御様の方からも、おまんを三個下されたい、まことに有がたい事じや、まあ同じ品と云ひ、數も揃ふて、三個づゝとは、御心が能ふ合ふて、何時〳〵までも是れが。オチ「六つ饅頭（睦まじう）あさる印であろふ。

庭掃除

コシラヘ『奴のすがたにて尻からげをして、壺洗いの箒をかたげて出る、後見の者は、燗瓶と帽子とを蔭の方へ持ち出しおく、奴一ぺんくるりと廻り箒をかげへ置きて立止り。

カブキ「掃いても〳〵散る木の葉、腕もすねも堪るものではあい」と。

一寸思ひ入れあつて、蔭にある燗瓶と帽子を兩手に持て出で。カブキ「さらば掃除にかゝろふか」と。燗瓶と帽子を持つて、箒にて庭掃く手付をあし、口にて囃子を云ふ。ハヤシ「かんぴん〳〵しやつぽんぽ、かんぴん〳〵しやつぽんぽ」。これを何遍も返して云ひ、掃く振して。カブキ「どつこいあの」と止り。鳥渡見得を切り、下を見て呆れ。ボケ「こりや鳥渡も掃けて無いぞ」と。燗瓶と帽子を見て。ボケ「掃んぢ苦じや、箒かと思つて持つて來たが、こりや燗瓶と帽子じや、槌で庭掃くと云ふことを世間で云ふけれど、此様もので庭が掃ぬはづじや。オチ「こりや箒の（大さあ）間違いであつた。

伽羅先代萩

景色『下駄。

口上「扨て先代萩を御覽に入れます、是れある下駄は伊達の君が召しました、伽羅の下駄とは違ひます、この下駄は安い品ものでございますが、この高尾が伊達の君へ贈りました發句は、名吟で御座ります、君は今駒下駄（駒形）あたり、おつと違つた、駒形あたりほどいゝぎす、又た是れは柾目に緒が立てありますから、是れが政岡で御座います、此下駄の木は上木か中木か下木かとのお尋ねでございますが、忠義もあれば外記もあります、この下駄の齒は至つて大きく御座いますれば、是れが大場道益でございます、又た名吟もあります、初雪や二の字踊み出す下駄の跡、是れでは木で二の字が出來ますれば、是が二本彈正で御座ります、この彈正がねづみ緒の術を遣いますが、餘り長いは。オチ「下駄（下手）の長談義でムいます。

堀川

コシラヘ『河原の逢引のおしゆんの姿にて、團扇を手に持つて出る。樂屋にて淨瑠理。上ルリ「思い廻せば廻すほど我こそ死おで叶はぬ身其方は科のあい身の上、ともに死んではお二人の歎き、生命おがらへ亡き跡の、問ひとむらひを賴むぞと」。こゝに蔭上るりを止て、三味線ばかりを彈く。ボケ「わたやそんお事嫌で、ワアヽヽヽ」と泣き氣をかへて又た上るりにおる。上ルリ「そりや開わませぬ傳兵衛さま、お言葉無理とは思はねど、そも這いかゝる。ボケ「どつこい違つた。上ルリ「逢いかゝる始めより、末のするまで言い交し、互いに胸

を明し合ひ、何の遠慮も内證の、世話しられても恩にきぬ」と。此處より團扇を下へたて、むけると又たたて、度々しながら身振する

上ルリ「ほんの女夫と思ふもの、大事の〳〵おつとの難義、生命の際に振りすて〳〵。オチ「此樣な團扇が（女子の道が）立つものかと」云ひながら、團扇をほる。

名物　鮓

コシラヘ『千本ざくらすしや塲のお里のすがたにて、張ぼて提げて出で下に置き、淨るりに合せて身振をする。

上ルリ「父も聞わず母さまも、夢にも知らして下さつたら、たとへ焦れて死すればとて、雲井に近き御方へ」。こゝにてぼてを手に取り、

上ルリ「鮓屋の娘が。オチ「ぼて提ふか（惚られうか）。

昔　と　今

コシラヘ『好みのすがたにて、角に包んで煙草を一つ持て出て。

コトバ「昔しは傾城のまことゝ、三十日の月と四角な鷄卵は無いと云ひまして、舊幣人あぞは無いものゝ比較に申しますが、斯ふ開化の世になれば、何事もかわつて娼妓もまことを云ふ、三十日も月夜があり、まあ一寸御覽じ」と。煙草を見せて。オチ「此樣に煙草（鷄卵）も四角なが出來るやうにありました。

上　り　船

コシラへ『好みのすがたにて、辨當を提げ楊枝をふところへ入れて出で、三味線を彈せて淀の川瀬を舞ふ。

ウタ「淀の川瀬のああ、景色を此處に引いて上る、やれ三十石夜船きよき流れを汲む水ぐるま、廻る間ごとにみんな水馴ざほ、すいたさかづきおさへてすけりや、酔ふて伏見の管まき綱に」。こゝまで眞面目に唄ひ眞面目に舞ふて、辨當を左の手に持ち、右の手に楊枝を持ちてオチ「斯ふしたところで、辨當出す楊枝（千兩松よい）楊枝〳〵〳〵よおい。

お世辭

コシラへ『女のすがたにて、小さい紅提灯に燈をともして提て出る。

コトバ「オホ、、、、是はあんたのお幼男樣で御座りますか、おゝ可愛らしい上兒さんで御座りますあ、何をあさる、おほゝゝゝ」と。丁ちんを向ふへ出して。コトバ「提灯〳〵赤か「ちよち〳〵あばゝ」で御座りますか、おゝ可愛らしやの」と。丁ちんを足で鳥渡蹴つてコトバ「おゝつぶれ蹴れ〳〵（つぶりてん〳〵）で御座りますかいあおゝお上手〳〵」と又丁ちんの火を消し。オチ「おゝ火消〳〵（失敬〳〵）で御座りますか。

千兩幟

コシラへ『鉄ヶ嶽のすがたにて、手遊びの藏を懷中へ入れ、稻川鉄タ嶽と書きし組合せを持て出で。

ナキカ「九平太様の仕かへしすれば、もう言分はおい、今日の角力は汝と俺、魚ごゝろあれば水ごゝろ」と云ひながら、一寸思ひ入あり て組合せを見せ、ふところより藏を出して手に持ち。カナキ「稲川オチ「土藏（土俵）で逢ふ

鳥刺

コシラヘ「着物を短かくからげ帶をゞめ、脚半い、わらじばき笠をかぶり女竹一本持ち鳥刺の扮装、後見は張拔

の塵取と掛あつめの帳と、賽にうどんの玉を包み、細繩で括りたるものと三品を持いださせ、花やかある囃子にて鳥を狙ふ振して出る。

カタ「刺いた〳〵見さいか、一つひよ鳥榕の木の枝に止りし鳥を、刺いてくりようと思ふて、腰の印籠のとりもちを出して、付けて延して延して付けて」と。此あいだにさし竿へとりもち付る振いろ〳〵あつて、竿をかまへ鳥を刺す振をする。カタ「鳥渡さいて見さいか。コトバ「あゝ刺せた〳〵、何じやひよ鳥が一羽と、すゞめせ一羽か」と竿より鳥をとつて、腰の網へ入るゝふりして竿をかまへ。カタ「一寸さいて見さいか」と。竿を突き出すと、今度は後見が竿へ塵取をかける。コトバ「あゝ刺せた〳〵今度は何じや、塵とりか」と。竿よ

り取つてうしろへやり、又たさす。ウメ「鳥渡刺いて見さいあ」。後見はかけ帳をかける。コトバ「あゝ刺せた〳〵、今度は懸とりか、もう一ぺす刺す」と。帳をはづして竿をかまへて。ウメ「鳥渡さして見さいあ」と。竿を突き出すと、後へうどんの簀に包みし竿をかける。コトバ「させた〳〵刺せたが、何じや重ひぞ〳〵」と。引よせ取つて解きてうどんを見せ考へる振して。コトバ「この玉は能ふ見るが、何鳥の玉であつれが忘れた、こうつと鳩でおしからすでおし、鷺でおし雁でもおし、あゝ思ひ出した。オチ「餫飩の玉（鶴々の卵）じやわい。

コシラヘ「女のすがたにて摺盆へ、すりこ木を入れて持て出て下に置き。

コトバ「おゝ、忙しかやの、日のみじかい事わいな、もう十一時や、早ふ味噌をすらんあらん、隣りのお駒さんは結構なもんやしあ、朝から淨るり語つてゐやはる、私も好お道じや、あの樣にして居たいが、それこそ如何の樣あお目玉貰ふも知れん、あゝ好い聲やあ」。この言葉の中より三味線方、二十四孝四段目の上るりを語り出すと、味噌を摺る振して聞いて居る。上ルリ「私れ民間にそだち人に面を知られざるを幸ひ、花つくりの簑作となつて入込みしは、幼君の御身

の上、若し凶事もあらんかと、蔭ながら守護するそれがし夫と悟つて抱へしか」と。こゝにて聞き入りうつゝに成しふりして、連木をかたゐのやうにして摺鉢の中へつき、勝頼の振にある。上ル「合点ゆかぬとさしうつむき、思案にふさがる一間には、やかたの娘八重垣姫、言號けある勝頼の」。こゝより味噌すり止めて、八重垣姫の振にある。上ル「切腹ありし其日より、一間どころに引こもり、床に槍、すがたかけまくも、御經讀誦の鈴のおと」。こゝで蔭止るり一寸止め地彈く　ホケ「おゝもう十二時に十分前にあつた、早ふすらん成らん」と。急ぎ味噌をすりかけると、樂屋にて又も止るりを語り出す上ル「申し勝頼さま、親と親との言號け、ありし樣子を聞くよりも嫁入する日を待ちかねて、お前のすがたを槍にかゝし、見れば見るほど美しいこんな、殿御と添臥の、身は姫御前の果報ぞと」。こゝにて味噌摺やめて連木を持ち、上るり語り〳〵八重垣姫の振にある。

口上ル「月にも花にも樂しみは、繪像の傍で十種香の、煙も香花とあつたるか、回向せうとておすがたを」。連木をかたげて。口上ル「連木かたげ（繪には書せ）はせぬものを　ホケ「わあゝ、何處も彼所もお味噌だらけにあつた」と。あわてゝ着物や方々の味噌を取つてすり鉢へ入れ。ホケ「やくたいじや、此樣ことは。オチ「もう味噌（二度）とせん事ぢやわい。

落

人

コシラヘ「忠三の切、鷺坂伴内のすがた、うしろ鉢巻して褌袢抜ぎか

け、たすき掛けにはかまをはき、股立をとり、大小をさし、好みのはやし入れ、下手へ出て上手を見こみ。

カブキ「やあ〳〵勘平」。三味線地入り。カブキ「見つけよつけたいつけたむけた」つて倒た。ポケ「どつこいしよ。カブキ「おかぼウを此方へ渡さばよし、嫌じや何ぞと」と云ひ。お輕勘平が側に居ぬ思ひ入れにて。ポケ「おゝ向ふへ行きよつた」と。走る振して上手へ行き、下手を見て。カブキ「やあ〳〵勘平」と云ひ。又た見ねぬ思ひ入れにて下手を見て。ポケ「又向ふへ行きよつた」と云ひ、又前の通りして。ポケ「又向ふへ行きよつた、足の早い奴ぢ」と云ひ、下手へ走り行き前のごとくして。カブキ「やあ〳〵」。今度は蔭を見失ひし思ひ入れにて、方々をきよろ〳〵見廻し。カブキ「やあ〳〵やあ〳〵。ポケ「何處へ往て了いよつた、何處へ往きよつた」と。探すふりいろ〳〵し、て、見物に向い。ポケ「鳥渡お尋ね申します、此所へ好いおとこの若いさむらひと、別品のこしもとと二人連で參じはいたしませんか」と。鳥渡聞く振をして。ポケ「そんな者は來んはてあゝ」と。思案して方々を見廻し。ポケ「何處へ往きよつたか。オチ「勘平（影）もかたちも見へぬ樣におつたわい。

白浪

ヨヘラヘ「忍びのすがた黑裝束、大小さし覆面にて、扇子を持て出る。チヽチン〳〵〳〵。カブキ「あゝ有がたや忝じけおや、まんまと寶藏へ忍び入り」と。ふところより扇子を出し。カブキ「首尾能く奪ひ取

つたる此一品、お旦那さまへ差し上ぐれば。オチ「扇子の風は、あをぎ（褒美の金は望み）次第じや。

待人

コシラへ「女のすがたにてかつを箱とかつを節を持て出て下に置き、向ふを見て。

コトバ「今日はお煮染を煮いて喰べよと思ふて、お喜代にお芋やこんにやくや南瓜を買ひにやつたが、まあ遅いこと、一体何して居るのであろふ」と外を見る思ひ入れして、又た座り。コトバ「まだ影もかたちも見ねん、何處まで行たのか、待つてる内にかつををあと削でおこふわいな」と。かつを箱を前におき、かつをを削き、向ふを何

遍も見る振をおし。コトバ「まだかいな、そして此節の堅いこと、一寸とも削れやせん、あゝ辛氣やの、お喜代はまだ戻つて來ず、かつを節は堅ふてかゝれず、これを世間で云ふのか、待るゝとも。オチ「削く（待つ）身になるおとは。

首實検

コシラへ「菅原寺子屋の場、春藤玄蕃のすがたにて、ぷところへかつを節一本入れて、淨瑠理を語り〳〵出る。

上ル「かゝるところへ春藤玄蕃」と語り。一寸正面を向き見得を切つて。上ル「首見る役は松王丸、病苦をたすくる鴉のりもの、門口へ舁きゆすれば」と語り。うしろを見て不思議相なる顔して。オチ「

駕も何もありやせんがあ、松王は何して居るのじや、此所へ松王が出てくれんと、首實檢が出來いで仕まいがつかんがあ」と。うろたへて四方をきよろ〳〵見まわし。ホケ「何じや駕夫が來んので出られん、あゝ駕で無ふても人力車でもよい、松王早う出て〳〵。オチ「かつを（松王）〳〵」と懷中よりかつをぶしを出す。

櫻時雨

コシウヘ「羽織着かがし麻うら草履をはき、蝙蝠傘をさして花見のすがた、少し醉ふた振して出る、但し草履の片足の方の鼻緒を切り、紙捻でつあぎ、直に切れる樣にする、又花やかなる囃子にて出で、向ふを見こみ。

コトバ「向じまへは何時來ても好い景色じやが、今日は咲ものこらず散りもはじめず、さくらの滿開で一層景色がよい、向ふの家根舟で藝妓が彈いて居るはありや何の歌じや」と。耳たてゝ聞くふりあり、この時三味線方は地を彈きはじめる。コトバ「あはゝゝゝ、あれは四季じやあれに合して唄ふてやろ」と、これより歌にある。

春の日あがに主と二人がむかふ島、合の手の間に、コトバ「面白い〳〵

これより舞ふてうたふ。ウメ「雪かみぞれが降るわいな、雪じやござんせんちら〳〵と」。此時舞ひあがらぐせり倒るふりし、草履の鼻緒を切る、この間は三味線をやめて居る。コトバ「あゝ仕舞ふた」と。草履を脱ぎ、切れたる鼻緒を見せる、三味線こゝで又た彈く。オチ「鼻緒切る（花が散る）」。

祭文

コシフ「着あがし手拭をすぢかひにして、たすきに掛けて出る、反古を一くゝりと、糊刷毛一つ、又盆の上に燭徳利に小鉢呑口を載せそれを後見が持出して蔭におくべし。

コトバ「今日は日和がよいので張物をしやうと思ふて、反古や刷毛を

買ふて來た」と。反古刷毛を見物へ見せ。コトバ「糊もたけたし、よしよしまあ張ものにかゝるまで、一寸ばい一をやらかそふ」と。盆にのせし徳利おどを前におきて、酒呑むふりいろ〳〵して。コトバ「あゝ能いあんばいに醉ふて、氣がうき〳〵して來た、一寸淨るりを久しぶりで語つてやろ、何を語つたものだろふ、十種香にしやうか玉三をやろふか」と。一寸かんがへて。コトバ「安達の祭文にしやう」と。上ルリ「あいとは云へど袖萩が、久しぶりのかゝゝの前。ボケ「どつこいしよ、かゝじやおい。上ルリ「母の前、琴の組とは引かへて、露命をつなぐ古糸に、皮も破れし三味線の、罰も慮外もかへりみず、おねがひ申したてまつる、今の憂身の瑚かしさ、父上や母さまの、お氣にそむきし報ひにて、二世の夫にも引きわかれ、泣きつぶした

る目あし鳥、二人が中の」。こゝにて反古を刷毛を、上るり語り〳〵
兩手に持て。上ルリ「これ此お君とて」と。一寸身振をして。ポケ「あ
はゝゝゝゝ、是や何じや」と。反古刷毛を見て。ポケ「袖萩の祭
文では無ふて。オチ「ばてはりの買物じや。

合羽屋

コシラヘ『着おがし、尻からげ頰かぶりして、箒へ脚胖一つ紐にて釣
り持ち出る、但し箒は落合まで蔭におく、三味線方に地を彈し。
ウタ「あまり日和がよふて、城の馬場で合羽屋が合羽干す、にわかに
天狗風合羽舞ひあがる、合羽屋おやぢが狼狽へさわいで堀へはまる
上げて」おくれ冷たいわいな」。こゝまで歌に合せて舞ひ、箒を持出し

て。オチ「はうきに片足脚胖（大きに憚りさん）。

松切

コシラヘ『着流しにて、はかまを穿き、忠臣藏二段目の若狹之助の思
ひ入れにて、箸一せん持て出で座り。
カブキ「本藏〳〵、今予が申すこと、何事によらず違背いたすな、留
だてあるおよ、昨日鶴ケ岡に於て、高の武藏守師直、予を若輩もの
とあなどりあまた大名のあつまる中にて、予に」と云ふうち、箸一
本を折りて向ふへ見せ。オチ「箸かたし折た（恥かゝしおつた）わや
い。

高砂

コシラヘ「着おがし袴つき、扇子を手に持つて出て、よきところへ正面むき座り、一座の人へまじめに一寸挨拶して身を構へ。

ウタイ「高砂や」と謠ひ切る時。三味線方にて、シャンと地を入れさせ立ちあがりて舞ひはじめる。ウタ「この浦舟に帆をあげて」とまで舞ひ、又た座りて。ウタイ「波の淡路の島かげや」とまで謠ひ、又た立ちて。ウタ「遠くおるのを沖すぎて」まで舞ふて、又たすわりウタイ「早や住の江に着きにけり」と謠ひ。直に立つて又舞を舞ひ。ウタ「早や住の江に着きにけり」と舞ひ終りて。コトバ「こりや何を云ふやらオチ「歌謠曲（うだ〳〵）と皆さんがお笑ひで御座りませう。

音頭

コシラヘ「旅客のすがたにて、椀に蓋して左りの手に持ちて出る。

コトバ「こう默つて歩いて行くのは、陰氣でいかぬ、一つ音頭とつて行ふじやおいか、さあやるぞ」と。聲を張りあげて、右の手で椀の蓋を持ち。オンド「おかさ放して（大阪離れて）早や玉つくり、よいよい、かさを買ふあら深江が名所、やあとこせい、よういやあ、はりやりや、これわいさ」と云ひながら、椀と蓋とを向ふへ突き出しオチ「蓋椀（さゝおん）でもせろい。

内氣者

コレラへ『羽織着流しにて、石鹸三個紙に包み持つて出で下におき、これを相人の思ひ入にて。

コトバ「春先の陽氣につれて、お伊勢さんへ大勢が參るが、君も參詣したのか、あに一寸も知らぬで參らぬ、まあ何たることだ、この頃は伊勢參りの道中で續いてあるがあ」と。紙包をひらきて、石鹸を出して。コトバ「君はほんとに。オチ「石鹸三個（世間見ず）じやあ」

不思議

コシラへ『黒の紋付着流し、朱鞘の大小をさし、大きおいかきを笠の思ひ入にてかぶりおる。

カブキ「ハテ心得ぬ、屋根にていたちが踊つて鳴き、地にはかわづか

『ひよこ〳〵、我が大望の成就する前表あるか、但しは叶はぬ知らせあるか」と。一寸思ひ入あつて。カブキ「凶事か吉事か、不思議の珍事を見ることよあ」と。一寸考へる振して。オチ「いかき着ても（如何にしても）心得ぬ。

鳴戸

コシラへ『おんあの姿にて、手にたんぽを持つて出で、向ふの方へ出し、阿波の鳴戸お弓とおつるの早がわりにて、おつるの臺詞の時はたんぽを動かす。

詠歌。カブキ「父はゝの、惠みもふかき粉河寺」。おつるの言葉。カブキ「順禮に御報謝」と、これまでは子役おつるの氣取にて云ふ、早速お

弓とおりて。カブキ「ても可愛らしい順禮の子、さだめし連衆は親御たち」と云ふて、今度はおつるの氣取りでたんぽを動かして。カブキ「イエ〳〵。オチ「ちろり（獨りで）御座ります。

遠巻

コシラヘ「百日かづらを冠り好みのずがたにて大小をさして出でかたなを拔き持ち正面むきて立どまり見得をきり

カブキ「計る〳〵と思ひしが、却つて彼奴に計られしか、ちる〳〵殘念あ、この上は死物ぐるいだ」と云ふをきつかけに、樂屋にてドンチヤンブウとあらす。カブキ「あの攻太鼓は、我を取り卷く物音あるかポケ「ひよう大勢出て來よる、こりや叶はん逃んあらん」とあわて逃る見得をあすと又も樂屋にて、鳴物をつゞけあらして、アリヤ〳〵〳〵と二三人にて云ふ。ポケ「こりや此方へは逃れらんぞ」と、又た他の方へ逃げかけると、鳴物をあらして、アリヤ〳〵〳〵と云ふ。ポケ「おや〳〵此處からも出て來る」と。あちらこちらと走り廻ることあり。ポケ「あゝこりや、オチ「どんちやん（どつちや）へも逃られんわい。

捨兒

コシラヘ「好みのすがたにて、茶瓶一つさげ、茶碗三個と、麪包三個、とを盆にのせて持出し、三味線方に、月がかさおりやの地を彈せて踊るおり。

ウタ「月が重おりやおかが眠れどせうぞいな、お腹をどしやうぞいな、向の産婆を呼んで來か」。この歌に合して、いろ〳〵踊り。ウタ「さあさ」にて、茶瓶を手に取り。ウタ「捨とけほつとけ」こゝで合の手に合して。ウタ「茶瓶〳〵（ちやつちやんちやん）」と、茶瓶を見せる。ウタ「出來たその子が」。この歌をつゞけ唄せ、これも歌に合して踊り、さあさと云ふところで、茶碗を取り、合の手にてウタ「茶碗〳〵〳〵」と、茶碗を三個おらべて見せる。ウタ「すてた其子を」より。つゞけて歌はせ、是もさあさと唄ふとき、パンを三個手に取り、合の手に合せて。オチ「麪包〳〵〳〵」と盆の上におらべるおり

奴八景

コシラヘ「尻からげして、胸をあけ、兩手を伸して袖口を持ち、何おりと脇ざしにして一本さし、すべて中乘の奴紙鳶の思ひ入れ、又た一方の手に小鉢を持そへ、一方の手に小さき升を持つ。

ウタ「春の日永に登りつめたるやつこ紙鳶」。この歌うたわせ、三味線に合せて花やかある鳴物にてはやし。コトバ「こう琵琶湖の空へ登つたところは、如何も云はれぬ宜い心地じや」と。見おろす振して。

コトバ「アレ〳〵逢坂山から大津の町が一目に見ゐる、向ふに見ゐるが叡山に比良の暮雪が、三井寺も堅田も粟津の松原、石山寺矢橋の船帆かけて走る、見ゐるわ〳〵」。この言葉の内、あちらこちらと眺める振いろ〳〵して、小鉢と小桝と向ふへ見せて。コトバ「それ〳〵こちらにあるは。オチ「勢田の空鉢（唐橋）こちらに見ゐるが唐崎の一つ桝（松）じや。

木曾の雪

コシラヘ「紋付の着附、かるさん穿き大小をさし、風呂敷包みをすじかいに負ひ、宮本武藏のすがたとおり、紙に饅頭とさつま芋とを包み手に持ち、山おろしの鳴物にて出で來り。

カブキ「まことや、思ひ出せば淵瀬とかわる、人の行末兩親にわかれ本國を出しより、浮つ沈んづ艱難辛苦はいくばくぞや、中にも備前岡山に於て、かたきの伯父たる白倉が奸計にて、既に一命おわるべきに、義女があさけに其場はのがれ」。こゝにて紙の中の芋と饅頭とを、兩手を持ちて向ふへ見せ。オチ「今また又たかぶる芋と饅頭（迷ふ木曾の山中）。

夕顔棚

コシラヘ「婆のすがたにて裾をからげ、たすきをかけて、右の手にバケツを提げ、左の手に柄杓を持ち衝立か屏風の蔭に居て。

上ル「「こゝに苅り取る眞柴垣、夕がほ棚の此方よりあらわれ」まで

は蔭にて語り、これより口上るりにて語り〳〵出て來る。口上ル「出たる婆の水汲み（武智光秀）」。是よりバケツを下へ置き、杓をいろ〳〵振り、光秀の身振すをる。上ルリ「水道引きよせ（必定久吉）この内に仕組みあるので水汲み（よし忍び居るこそ屈竟一）ちよつと一杯と栓捻ぢまわし（たゞ一突きと氣は張り弓）と」と。語り、バケツの上の方へ手をやり、水道の栓をねぢる真似をおし、口にてジヤ〳〵〳〵と水の出る音を云ひ。ボケ「おゝ直に一杯にあつた」と。栓を捻ぢ止める振して、バケツを重そうに提げ、又た下におき又た提げて、ひよろ〳〵として下に置き。上ル「こゝろは矢竹」と語り。ボケ「うんとあ」と。バケツを提げ。ボケ「あゝ辛度」と。又た下に置き。ボケ「こりやまあ一体何をしておることやら、尼ケ崎での武智光秀で無ふて。オテ「ばゝゝが提るバケツ水入と云ふのぢや。

娘道成寺

コシラヘ「振袖のむすめの姿、黒塗の盆のうしろへ、茶碗をかくして塗笠の思ひ入れにや、手に持ち、花やかゐるはやし入り。

カブキ「我は此あたりに住む、白拍子にて候、うけたまはれば此御寺にて鐘の供養がござんすそうあ、何卒拜まして下さんせぬか」と。云ふと樂屋より二三人の聲にて。コトバ「いや〳〵女人はかた〳〵禁制の此寺、おがます事はあらぬ〳〵。コトバ「おゝかたやの爾う云わんと内密でわたい一人だけ拜まして下さんせいあ」。樂屋より。コトバ「女は一人でも半分でもあらぬ〳〵。コトバ「そあいに云はずと拜まし

て」。樂屋より。コトバ「あらぬ〳〵。コトバ「ナニおがますことはあらぬ、拜ませあけりやあ、横面張り倒すぞ」と。男の臺詞にて力味て云ふと、又も樂屋より。コトバ「あらぬ〳〵。コトバ「そう云はんと一寸だけ」と。やさしく女のせりふで云ふと、樂屋より。コトバ「一寸もあらぬわい」。この時盆の上へ茶碗を上せて向ふへ出し。コトバ「お〻好んこと憎てらしい。オチ「盆茶碗（坊）さんじやあの。

釣燈籠

コシラヘ「忠臣藏七ツ目茶屋場の由良之助のすがたにて、文をひらき手に持ち、三尺ほどの竹の端へ手遊びの酒樽を糸にて釣り、首筋へさして出る、淨るりを語りながら身ぶりをする。

上ル。「釣燈籠のあかりを照し、讀む長ぶみは御臺より、かたきの樣子こま〳〵と、おんなの文の後やさき、まゐらせ候ではかどらず、余所の戀よとうらやましく、おかるは上より見おろせば、夜目遠目あり、字性はおぼろ、思ひついたるのべかゝみ、出してうつして讀み取る文章、下家より九太夫が、繰りおろす文、月かげにすかし讀むとは神あらぬ、ほどけかゝりしおかるがかんざし、ばつたり落れば下にははつと、見あげてうしろへかくす文」。こゝで文を捨て、樽をつけし竹を手に持ち、高くあげて見て。コトバ「お樽（お輕）やそもじは其所に何してぞ」。こゝにてお輕の身振にあり。コトバ「私しやお前に呑みつくされ（盛りくづされ）あまり愁さの酔さまし」と言ひ、竹をうごかして。オチ「竹に釣られて（壁にもたれて）居るわい

あゝ。

御愛嬌

コシラヘ「老人好みの風。

コトバ「誰でも云ひますあゝ、酒の席は女にかぎりますと。いやもう女からでは夜があけませんせ、それも素人よりも藝妓にかぎる、何でも酒の座敷は女が出てくれませんとぎわつきます、だから、私の樣ゐ老人が一枚交ると皆の衆が煙たがつて、さつぱりど

座が浮ぬと云はつしやるが、そりや大變ゐ了簡ちがひじや、昔しから云ふてある。チチ「爺もあけねば浮れまい（雉子も啼かすば打れまい）。

蝶よ花

コシラヘ『女のこしらへにて、足袋を持つて出る。

コトバ「阿母さんが和女は世間見ずじやと、此あいだも仰しやつたから妾しや火の見からそこらの世間を見ておいたら、ところが又た一つ小言が出たのじや、この足袋を縫へと云ふてじや、何をさすもお前を憎いと思ふてじやあい、可愛いと思やこそじやと、可愛けりや何もこんゐ足袋ゐぞを縫さずとも、お芋をたんと喰べさして、寢か

しておいてくれると宜いに、それにこんな物縫へとは、ほんまに阿母さんの心が合点がいかぬのじや、いや解つた、能く世間で云ふことじや、可愛い兒に足袋を縫せ（旅行をさせ）じや。

板ばさみ

コシラ（下女のこのみ、膳と鉢とを持つて出て。

コトバ「旦那さまも御主人ぢら、奥さまも御主人だ、御主人の言つけは何でもハイ〳〵へイ〳〵と聞ねばならぬものじやが、併し今旦那さんが此鉢を洗つて來いと云しやると、此方から又た奥さんが、この膳を洗つて來いと云はつしやるし、さあ斯ふなつたら大變に難義じや、旦那さんの鉢を先にすれば、奥さんへすまずと云ふて奥さんのお膳から先に洗へば、旦那さんが怒らつしやるだろふ、ほんまに中に立つた柱のわたしが一ちつらいて、こりや一つ考へものだ」と よろしく思案のこゝろしありて。コトバ「考へついた、やはり奥さんの御用から先にするのが道じや、何故あれば。オチ「膳は急げ鉢は後（膳は急げ惡は後）にせいと云ふからあ。

夏の夕

コシラ（隨意、線香を持つて出る。

コトバ「あゝるらい蚊じや、蚊帳は不屆お奴で、久松と洒落くさつてお藏の内のお住居だ、夫は爾ふと蚊帳の代りに、線香を立てたら、いまじいと云ふことじや、それは小唄にも云ふてあるわい」と。こ

れより唄にある。ツメ「間違やまちがふものだよ、地震がごろ〳〵、かみおりゆさ〳〵、蚊帳よ嬶つれ臍たて。オチ「線香くすべ（隠せ）。

惚れ薬

コシラヘ『老爺のごしらへ、鉦を持つて出る。

コトバ「あゝおむあーみだーぶつ、〳〵、〳〵、兎かく年寄は如來さまのお蔭がかんじんじや、どれ〳〵御かんきんでも致しませう、あまいだ」。チャン。チンアツ「あまいだ」。チャン、〳〵。コトバ「然しお念佛は申すものゝ、此樣にかんきんしたら極樂へ往れるか知らん、とかく地獄へ往ぬやうに、鉦でもちつと餘計に叩いておきませう、ほんに爾ふじや」と。鉦をチャン〳〵〳〵〳〵と叩き。コトバ「これがいろはだとへに云ふてある。オチ「擂木の沙汰も鉦（地獄の沙汰も金）次第じや。

千秋万歳

コシラヘ『尻をグッとからげて、白き手拭で手を卷き扇子を持ち、着物は天窓から冠り鶴の思ひ入れにて、鶴の飼ひろひと云ふこゝにて、謠曲にて出る。

ツメイ「池のみぎわの鶴龜は、蓬萊山によそおらず。コトバ「則ちこゝが蓬萊山じや、龜どのを待つて居るのに、出て來ぬのは、又た酒呑んで管をまいて居るのじやあ、よわひも長ければ氣もながいわい私でさへ。狂言「くちばし長く首又たながく足ながく、よわひも長く

能くそろひ。コトバ「と云ふのじや然し龜殿はおそいことじや、わしは酒を呑ぬゆへ、待ち遠いことである、又た今にでも龜どのが見へたら合舞でもしたら、定めて。オチ「鶴龜舞ふて（つかまへて）酒呑そふと云ふであろうわい。

枯尾花

コシラへ「信仰記の乳母おちうの思ひ入れにて、汁椀と手塩皿とを持つて出る。

カブキ「もふし椀家具（若君）さま、わたしが負ふてあげます筈、かへつてお前に手鹽ひかれ。オチ「皿（逆）さま事でござります。

相すまん

コシラへ『箒を持つて出て。

コトバ「誰やこの箒を、買ふて來てくれたはお前か、そうか。オチ「箒に（大きに）はゞかりさん。

地獄の土産

コシラへ『まな板に菜を上せて出る。

カブキ「むすめ覺悟は好いか。オチ「ハイ菜まな板（南無阿陀彌佛）。

秋の蟬

コシラヘ『三味線を持つて出る。

コトバ「三味せん（最前）から、私しに吾妻獅子を彈けと云ひあさるが、あれは免許ものじやゆゑに、手事にも唄ふたことは無いと斷り云ふても、聞いてくれんとは餘ほど。オチ「糸を駒らし（人を困らし）あさるのじや。

柳の影

コシラヘ『大平を持つて出る。

コトバ「あーら不思議やな、面妖か、如何したんだろ、大平のうぎが影も形も見せぬ、こりや。オチ「幽靈のかば燒（濱風）じや。

鬼の毒藥

コシラヘ『好みの風にて杯洗と汁椀とを持つて出る。

コトバ「あれまあ、こんな道樂なことをしてある道樂ついでに、この盃洗で椀を洗ふてやろか知らん、然し人が見たら笑ふであろふ。オチ「杯洗の事すりや俺が碗洗ふ、來年のこと云

や鬼が笑ふ)。

寝耳に水

コシラヘ『着かがしにて、思ひがけなく返事をしながら出て。

コトバ「へイ〳〵何處からお呼びなさいましたので御座ります」と。床の間の掛物の側へ往て。コトバ「此處にも誰もおらん、活花かけもの(一体影も)かたちも見へぬが、こりや。オチ「床(何處)から呼んだのじや。

命の洗濯

コシラヘ『五斗兵衛のこしらへにて、酒樽を持て出る。

ボケ「へイ〳〵もうお攝ひ下さるか、私くしは銘酊いたしました、是で暫時とろ〳〵とやります」と。ちよつと奥を覗いて見て。コトバ「イエ滅相な、じやら〳〵と鯛の濱焼取りにやる、ぼん〳〵と好いかげんにじやら付かされ、御免〳〵」と。酒樽をまくらにして寝ると蔭にてボンと音をさす、之をきつかけに起き上り見得をきり、五斗のこなしにて。カブキ「今云ひしてんごうか、向ふに借ありて内に銭おし、さては濱やきちやりてんごう。ボケ「るゝいま〳〵しいこりやオチ「樽木(狸)に誑されたのか、何の五斗(事)か、譯がわからぬわい。

鼻ふ

コシラヘ『好みの風、朱の大平を持つて出る。

コトバ「うぎのかば焼をお客に出してくれと、頼まれて持て來たが強い旨そうな香がする、ちよつと内證で一切加げん見てやろ」と。蓋を取つて見てびつくりし。コトバ「やあこりや中に何にも無い、如何したのじや、私や喰やせん〳〵。オチ「太平は朱椀、乃公は知らん〳〵。

朱の太平おき時は、他のものを用ゆれば、うぎの蒲焼と云わず、何やらお汁のものとばかり云ふて。オチ「太平汁椀ぞ」と云ふ落にしてもよし。

拳の勝負

景物『相撲地圖。

口上「私しは拳が不案内で御座りますゆゑ、拳のひとり稽古の本を買ふと存じまして、書店へ參りましたら、折あしく品切でございましたから、すご〳〵と戻りかけますると或る古道具屋に掌中相撲一覽と題た書物が出て居りましたから、捨てる神あれば拾ふ神ありと、悦こんで考へましたは、掌中とありますは、手のひらの中のことゆゑ、其手のひらの中の相撲とは、拳の事に違ひおいと存じまして、購めて歸りましたら、こんお繪圖でございました、拳をいたす揚げ土俵と申すをこしらへ、上手下手を取り組みますゆゑ、夫れで相撲と書きましたのかと思ひましたら、全たくは爾ふでは御座りませんと掌中相撲一覽と云ふので、私しの讀み違ひでありましたが、一覽を

どざりますれば、いゝりやんでも御座いませふか、又たかやうにいくらも山が書いて御座りませう、これはさんで御ざりませう、又た道のりの數あども書いてござりませう、又た處々に川も見ゑますれば、流でございませう、一体これは地圖を書きましたものゆゑ、地槍でもございませう、この邊は由井ケ濱もあり、甲斐の高峰も見へます、元頼朝公の居られました處、頼朝公はまつり事の權をとつた人だそうにございます、殊に右幕下と申しますからは、定めて前のうちの。オヽ「打手と見へます。

代りなき　縁

コシラヘ『仲居好みの風、銚子を持つて出る。

コトバ「あゝこれ〳〵お銚子が無じや、仕かへておいで、あゝこれおいよばどん、今お座敷で琴さんが長ふあつて居てじやつたせ、起してあげておくれ、ほんに妾しとしたことが、お銚子の無にたつて、かん（何）のことじや、丸でわやじやがあの、妾しのわやも今日ばかりじやござりませぬ。オチ「銚子（常時）そんな事云ふて居るのじやわい。

小倉の　花

コシラヘ『水鉢に酒盃を浮して出る。

コトバ「何じやいあの、水鉢にさかづきばかり浮しておいて、肝じんの酒がおい、はあん解つた、酒のかわりに此さかづきで、この水を

呑めと云ふのか知らん、ゑゝ百人一升（首）の歌にある、酒はつれおく呑みしとぎれより、さかづき許り浮物はおし、あれはたしかに壬生の忠峰じやつた、これは。オチ「水のたゞのみと云ふのじや。

浦島の夢

コシラヘ『大平の中へ眞切を入れて出す。

コトバ「はまぐりの吸物じやと云ふたが、如何云ふかげんじや、一寸見てやろ、よおこりや如何じや、こんな物が出た、こりやはまぐりが龍宮を吹くことを、兼てより聞いて居るが、斯樣なものとは珍らしい、是れもやつぱり。オチ「心切ふ（晨氣樓）じや。

二つ正月

コシラヘ『氣流にて、三味線を持つて出る、着流し好みあるべし。

コトバ「二輪加〳〵と三味線から、何をして居るのんじや、みんな糸さんが笑ひなさるじや、ほんにこりや胴紫檀じや、あまり棹らしなつて來た、わしも餘程つらの皮の厚い、八つ乳じやと笑われてるかも知れんが、ほんに。オチ「こりやばち（耻）知らずじや。

商賣氣質

コシラヘ『下男の好み、連木を持つて出る。

コトバ「あの宅の旦那さんが、三助、連木を一本買ふて來いと仰しや

つたが、何處に賣つてるか知らん、どうぞ一本買ひたいものじや、おつとある〳〵、もをし〳〵、連木やさん〳〵、この連木はかけ目いく〳〵らします、おに目をかけて賣るものじやおい、おーる程。オチ「連木にかけ目（現銀かけ直）おしちや。

二月十五日

コシラヘ『好みの風にて、行燈をさかさまにもつて出る。

コトバ「今日は舊歴の二月

十五日だから、こうやつて京へ上つたのを幸ひに、東福寺へ參詣して」と。行燈のさかさまを見せて。コトバ「おさか（お釋迦）樣の」と。今度は横にして。オチ「寢行燈（涅槃像）を拜んで來ませう。

四角、鳥居

コシラヘ『住吉踊りの振にて、楊枝の筒に杉楊枝を入れて持て出る。

コトバ「さあ〳〵坊さんお出おさい、アレ〳〵向ふにあおい踊つておりますがお」と。夫より楊枝の筒を中におきて、其ぐるりを廻つて住吉おどりの見得ある。ウタ「岸のお姫松めでたさる、御きとう〳〵

コトバ「はあゝこりや私ひとり。オチ「杉楊枝（住吉）踊りをしたのじや。

喜劇　戀の醫學士

脚色者　秋野秋蝶

人物

木村久兵衛（六十才位）＝後妻おつぎ（四十才位）
娘おあい（十七八才）＝紳士西龍夫（二十七八）
下女玉江（二十才位）＝公證人三好直一（五十才位）

場所

久兵衛部屋

富豪家木村久兵衛居室の体宜しくあるべし、賑やかなる鳴物にて幕明く〳〵と、下女玉江手に小さき書附を持ちながら登場。玉江「おや旦那

さんの姿が見へないは、迷兒の〳〵旦那さん」と調子に乗つて、喋舌つてる所へ、上手屋体より久兵衛病氣に惱める体にて登場。久兵「こらア、何が迷兒の〳〵旦那さんだ」、玉江は吃驚りして、それへ平座り。玉江「へイ竹内さん所で書附を貰ふて參じました」久兵衛は重〳〵しそうに机の前に座りながら。久兵「竹内先生所の藥價の書附か、それに置といたら宜し。玉江「へイ」と下女は虎口を逃れたる体にて退場、跡に久兵衛は眼鏡をかけて書附を見る。久兵「ゐゝと、散藥が三十日分、金六圓也、うむと先月は二日から呑んだから二十九日分で有りそうなものだが、あゝ爾ふか、大の月だから、やつぱり三十日ある、一日分が二十錢で、二三が六圓か、それから含嗽劑が八回分で金八十錢、こいつは驚ろいたあ、格別咽喉は痛みはせんと云つ

てるのに、無理に惡いのだと云つて、自分に惡いことにしてしまつて、一日分が十錢とは酷すぎる、鹽剝の一オンスも買つたところで幾何するものか、馬鹿〳〵しい、藥劑九層倍と云ふが、それでは九百層倍だ、それから次は、鎮痛藥が五回分で六十錢か、うむ、これは詮方がない、必死の苦痛を取つてくれたのだから、それから何だ種々手術料十八回分で、金貳圓と飛んで五錢也、おや〳〵手術料だと、俺は格別負傷をした覺はあし、外科の療治をしてもらつた覺はないが、うむ、あゝこの間臀の瘡毒を切つてもらつたのと、吸入をやつてもらつたのだが、それで貳圓とんで五錢とは、思ひ切つてるが、こうつと」と、算盤パチ〳〵と彈つて。久兵「先づ六圓也か次が八十錢、次が六十錢で七圓四十錢、それへ貳圓と飛んで五錢を

加へると、合計金九圓四拾五錢也、あゝ〳〵不味い苦い物を呑んでおまけに辛い思ひをして、それで生命を縮めて、高い藥料を拂はねばならぬとは、實に情けないことだ、あゝ竹内さん程の名醫でも、定まつた壽命と云ふものは、如何にも詮方の無いものかな、あゝ又た熱が發て來たらしい」と、自分に脈搏を試み。久兵「やあ脈が多くあつて來たぞ」と、此度は胸へ手をあて。久兵「さあ大變に鼓動

が烈しくおつて來た、あゝ俺が斯ふやつて苦しんで居るのに、誰も側について居ないとは、怪、怪しからん奴等だ、まるで俺を犬猫同樣に心得て居やがる、おい、誰か居ないのか」と、高らかに呼べど、更に返答なし。久兵「おい、誰たれか居ないか、誰も居ないのか」と呼べど、返答ないから、癇を發して一聲〳〵と聲を高からしめ、ます〳〵焦躁込みて、傍への呼鐘をつゝけさまに鳴し立て久兵「

ゑゝ何處まで俺を馬鹿にして居るのだ、家中揃つて聞こえない振をして居やがる、玉江もおあいも、あいや、玉江や、おいあい、おい玉江、おいあい、おい玉おい、おい、ゑゝぢれつたいあ、玉江〳〵〳〵」チリン〳〵〳〵。久兵「玉江、あい」、チリン〳〵〳〵チリン〳〵、下女の玉江あわてゝ登場、入口の柱にて頭部を打ちし体、前額を押へながら。玉江「あいたゝゝ、あ痛い〳〵、旦那樣、貴君があんまり性急に御呼びあさるものですから、あいたゝゝ」と座敷中を轉げ廻る体に、久兵衛は呆氣に取られながらも、未だ激怒は止ず。久兵「馬鹿、いゝ年齡をして、何、何を騒ぎやがるんだ。玉江「何をではございません、入口の柱で天窓を破れるほど、撞着けたので御座いますよ、あいたゝゝ。久兵「何だ柱へ撞着つた、其ひたいを打つ付け

たら、柱の方へ穴が明いたろう。玉江「穴が明ふと、大きな御世話様でございます。久兵「何の御世話あるものか、自分の家屋を爾ふ矢鱈に毀されて堪るものか。玉江「それでも貴君の葬式を出すまでは、大丈夫に保ちますから、御安心なさいまし。久兵「ゑゝ、此奴めが、また其樣事を云やがるな、もう我慢が出來ない」と、久兵衛は怒りの上に怒りを發し、病氣で惱める身体を起して、拳を固めて玉江を打んとすれども、玉江は素ばしこく彼此彼へと身を拔げながら玉江「だつて旦那さま、貴君は御自分で無理から、彼の藥研醫者に御かゝりあさる人ですもの。久兵「おに、藥研醫者とは、一体誰のことだ。玉江「誰だつて、貴君、あの竹の子ではあかつた、あの竹内先生の事でございますあね。久兵「竹尾先生が何是藥研醫者だ。玉江「だつて旦

那さまの生命をだん〳〵磨滅して了ひますもの。久兵「ここいつ奴、また其樣なことを吐しやがるな」と、彼方こちらと追ひ廻す、この物音を聞きつけて、久兵衛が一人娘のお愛が出で來り。お愛「あらまあ、阿父さま、如何遊ばしたのでございます、玉江も何だね、如何したんだよ」、久兵衛は息をはづませながら。久兵「おお愛か、此奴は此奴は詮方のない奴だよ、他の惡口ばかり吐して、俺の葬式や、藥研やと。玉江「おゝ御孃さまでございますか、旦那樣は詮方が御座いませんよ、腹ばかし御立なさいまして。久兵「おに、此奴が惡口を云ふから怒るんだ。玉江「御怒りなさいますから、惡口を申しますのです。久兵「惡口を云ふから。玉江「お怒りなさるから。久兵「怒るから。玉江「惡口を仰しやるから。久兵「怒る。玉江「惡口。久兵「お。玉江「わ。

久兵「おわ」。双方錯綜にあり、終に何が何やら分らずあるに、娘のお愛は呆れ返り。お愛「まあ〳〵馬鹿〳〵しいぢやございませんか、阿父さま、まあお氣を鎭めて」。此時玉江は側から口を出し。玉江「御心しづかに生害あれ。久兵「又此奴が」。久兵衛が猶も怒り出すを、お愛は和めて。お愛「玉江、詮方が無いぢやあないか、主人に向つて何て事を言ひますか」と。叱られて玉江は默してゐる。お愛「一体、阿父さま如何遊ばしたの。久兵「如何て、少し用があつたので、誰かに來て貰ふと思つても、誰も返事をしないから、少し腹が立つて居るところへ、この玉江が來る早々、縁起でもない。玉江「何も縁起でもないことは申しは致しません、たゞ葬式。お愛「これ煩さいね、默つて御在つたら。玉江「はい。お愛「あの阿父さま、玉江には私しが後剣で

言つて聞かせますから、まあ御氣を御靜め遊ばしましゐ、そして如何云ふ御用でございます。久兵「用と云ふのは何だ、あの、これから一寸竹内先生の許まで行つて來るから、帽子と外套を出してもらひたい。お愛「あらまあ、此寒いのに御出をすつては、御惡くはございませんか。久兵「いや、如何せ永くは持たん生命だもの。玉江「いよー御株が始まつた。お愛「默つて御出つたら、詮方が無いねね。玉江「へエ。お愛「何あら、玉江でも使ひに御遣り遊ばしましたら。久兵「いや此奴おぞで分るやうお用ぢやあない。玉江「妾しが參るほどの大した用でもございますまい。お愛「又かね、御默りつたらねね」と叱られて不平顔、久兵衛は傍にある羽織を引かけながら。久兵「お愛、早く持つて來てくれ。お愛「それぢや、如何でも行らつしやいますか久兵「

あ、行つて來るよ。お愛「ぢや玉、持つてお出あさい」。玉江は少し憤
懣氣味にて、ツイと立つて、外套と帽子を取つて、お愛の前へ置い
て、つんとして居る。お愛「何て、無雜作な風だろうねね、御氣をお
つけよ」と叱りながら、父の背後より外套を羽織りかけると、久兵
衛は帽子を被つて。久兵「ぢや、行つて來るから、阿母樣が戻つて來
たら、そう言つてくれ。お愛「ぢや、お靜かに行つて來らつしやいま
し」お愛は父を送りに出づ、跡に玉江は一人澁面を作りながら、こ
れも續いて出んとするを。お愛「玉江、お前は宜いから、此處を片付
けといておくれ」と言捨て、父子とも退場、玉江は不平らしき顏面
にて獨り言。玉江「あゝ〳〵親子ほど好いものはないと見える、御孃
さんは平素こそ、玉江、妾しはお前を奉公人とは思はないよ、妾し

は眞味の姉と思つて居るあんて仰有つても、お腹の中ではやつぱり
奉公人は奉公人と思つて居らつしやるんだよ、今あんぞ、何でも旦
那さまの肩ばかり御持ちあすつて、二言目には默つて居そ〳〵て、
あゝ口惜しい〳〵、ウワア」と泣き出しおる所へ、お愛は父を送り
て戻り來り、此体に吃驚あし。お愛「玉江、如何したの。玉江「ウワア
お愛、玉江、玉江つてば」。呼べど答へず。お愛「玉江、如何したの、お
腹が痛むの、泣いてちや解らんじやないか」。猶も答へあし。お愛「玉
江、玉江つてば、如何したんだね、お前耳がないのかね。玉江「如何
せ、妾しの耳あぞは御孃樣には見にますまい。お愛「あゝ憎らしい、
あんな事を云つて。玉江「御憎がり遊ばせ。お愛「そんなにぶり〳〵し
て、如何したのさ。玉江「如斯やつて居りますのさ。お愛「おや變な事

を御云ひだねね。玉江「變で御座いますとも、大變に變でございます如何で妾しは召仕ひでございます、一期半季の奉公人でございますお愛「奉公人だから如何したと云ふのさ。玉江「奉公人でございますから、馬鹿にされるんでございます。お愛「へね、誰が馬鹿にしたの。玉江「はい、木村の御嬢さまが馬鹿にあさいます。お愛「木村の御嬢さまつて、お前妹の千代のことかね、あんな小兒の事を取上る奴があるものかね。玉江「いゝね、お千代様は御年齢に似合ず、御和順うございますけれど。お愛「ちやあ、誰がさ。玉江「はい、お愛さまと仰しやる御想領の御嬢様が」と言さして、シク〳〵と泣き出せば、お愛は吃驚りして。お愛「おや如何したんだね、妾しが何時お前を馬鹿にしました。玉江「只今、へイ〳〵おさいました。お愛「まあ驚ろいた、

玉江、お前如何かしてるね。玉江「ですから、如斯やつて居りますのです。お愛「妙じやあいかね、急にそんな事を言ひ出してさ。玉江「御氣の毒さまでございます、奉公人でも生憎口を有つて居るもので御座いますから。お愛「玉江、お前はおつうにからんで。玉江「へイ垣根の糸瓜です。お愛「おほゝゝ、何を云つてるんだよ、奉公人々々と、お云ひだが、ぢや何だね、先刻妾しが叱つたものだから、お前はそれを怒つてるんだね。玉江「はあ、いゝね。お愛「いゝねぢや無いよ、馬鹿々々しい。玉江「どうせ、妾しは馬鹿でございますよ。お愛「誰も馬鹿だとは云やあしないぢや無いかね。玉江「ですから、馬鹿でございますよ。お愛「だつて玉江、それはお前無理ぢやあいか、阿父さまは御病氣の所爲かして、一寸した事でも直ぐ御怒りあそばすんだも

の、それに逆つては濟あいぢや無いかね。玉江「ですから、澤山妾しをお叱り遊ばしまし、御自分の勝手な時には、他人と思はないの姉と思つてるのと仰有つたつて、御用が濟めば褒美は延期、もう直に首にするばかりだ、あゝ〳〵詰らない、あゝ〳〵情けない。お愛「玉江、お前だつて、妾しの心を知つてるぢやないか、阿父様の前もあるもの、無暗とお前の肩ばかり持つ譯には行かないぢやないか。玉江「ですから、姉妹でも姉でも。お愛「玉江、妾しはお前をほんとうに姉妹と思つてるんだよ、思つて居るから猶人の前では他々しくするじやないか。玉江「ぢやあ、眞正に御叱り遊ばしたのぢや無いので御座いますか。お愛「誰が眞正に叱る奴があるものかね、お前ほども無い、あれが解らないのかね」と、優しく云ひながら、手に持ちた

る手巾を以て、一寸玉江の横顔を掃ふ、玉江はニツタリ笑わんとしてあはてゝ、お愛の手巾を引たくり、顔を隠して了ふ。お愛「ね、玉江、妾しの心は今云ふ通り變らないんだから、お前惡く思つてくれてはいけないよ、ね玉江、氣に障つたら何卒堪忍しておくれな、ね玉江。玉江「あら、勿体ない、妾しが惡いんでございますから、何卒御ゆるし遊ばして。お愛「そんなに難かしく云ふと、却つて不可ないよ、既う此話はよして了つて、他の話をしやうぢや無いか。玉江「左樣でございますね、如何云ふ御話しに致しませう。お愛「あら嫌だ、わざと其樣に極つてさ、何か嬉しい話しをしやうぢやないか。玉江「左樣でございますね、薩摩芋をいたゞいた御話しでも。お愛「あら馬鹿々々しい、そんな話はいけないよ。玉江「では御芝居の御噂。お愛「

いやだよ。玉江「困りましたね、ぢやあ、彼の方の御話しが宜しうございましやう」。お愛は心に嬉しさ隠して。お愛「あの方つて誰玉江「ほら、彼の方でございますよ。お愛「だから、彼の方つて誰だつてのさ。玉江「だから、彼の方でございますと申し上げるんでございますよ。お愛「彼の方つて方は、妾知らないよ。玉江「へゝ、御存知がございませんの、それぢや止しませう、御存知の無い方の事を申しあげてもつまりませんからね」と。わざと濟して云ふ、お愛は後悔の体にて。お愛「玉江。玉江「何でございます。お愛「玉江、如何したんだね玉江「ですから。お愛「また、如斯やつて居るのかね、仕様がないねゝ玉江「だつて御嬢様こそ、詮方がございませんわ、好い御咄しを致そうと思ひましても、御嬢様は御存知がないと仰有るんですものお愛「それから知つてるよ。玉江「へゝ、何を御存知なの。お愛「不可ないねゝ、玉江、お前は眞正に人が悪いよ。玉江「へイ、左様でございますかね。お愛「大抵におしなね。いゝ、既う話しをんかしをくつて好い」と、今度はお愛が怒つて見せると、玉江は少しうろたへ氣味で玉江「宜しうございます、御話し致しますよ、ほら彼の。お愛「ほら、彼の玉江「これぢや何だか、妾しの好い人の事を申し上げてるやうで御座いますねゝ。お愛「左様かも知れないわ。玉江「あらまあ、御人の悪いぢやあ左様御願ひ申しませうか。お愛「御本人が御承知なすつたら。玉江「御嬢様、薬が強すぎます事ねゝ、もう澤山でございますよお愛「まあ、斯う少し召しあがれな。玉江「御串戯じやございませんよお愛「だけどもね、玉江。玉江「何で御座います。お愛「厚顔しいやうだから

既う止さうよ。玉江、何も貴嬢と彼の間でございますもの、宜しいちやございませんか。お愛「では云ふけれどもね。玉江「はあ。お愛「彼の方ね。玉江「はあ。お愛「男にしては随分御清酒お方ねね。玉江「はあ、お愛「大変に上品お方ねね。玉江「はあ。お愛「そしてにやけあいから感心ねね。玉江「はあ。お愛「それに御容子が好い事ねね。玉江「はあお愛「彼の第一、御柔和くつて實が御ありおさるとさ。玉江「はあ、お愛「いやだよ、玉江は、たゞはあ〳〵はあ〳〵つて計かり云ふて。玉江「だつて其通りでございますもの。お愛「其通りだつたつて、他に何とか云ひ様がありさうおものぢや無いか。玉江「では宜しうございます、御清酒でもございません、上品でもございません、にやけて居らしつや、容子が悪くつて、つゝけんどんで實がおくつて。お愛「いゝよ

何とでも云ふが好い、どうせお前の目には能くはあるまいさ」と。少し勃然としたる体に、玉江は少し驚ろいて。玉江「おや〳〵また御怒り遊ばしたの。お愛「怒らおくつて散々他の、悪口を云ふんだものを。玉江「だつて、それは御無理で御座いますわ、感心して伺つて居ると、何とか云へと仰有いますわ、何とか申し上げれば直ぐ御不興でね、妾しだつて如何にも致しやうは無いじやございませんかお愛「何とかお言ひとは云つたけれど、悪く云へとは申しませんはい〳〵玉江「成程、これは玉江が悪ふございました、あんまり御嬢様が御のろけ遊ばすものですから、つい岡焼で、あゝ申しあげたんで御座いますから、ね、御嬢様、御堪辨あそばして下さいましお、ね、御嬢様。お愛「ぢやあ、眞正に彼方をくさしたのぢや無いのかね。玉江「

無いどころじや御座いません、そんな御清酒な方を。お愛「眞正にかね。玉江「眞正の段ちやございませんこと、あんな上品な御方を。お愛「お世辭ちやあるまいね。玉江「御世辭だなんて勿体ない、御にやけあさらないから、感心でございますよ。お愛「それは爾ふだね。玉江「左樣でございますとも、それに御容子が宜しうございますからね。お愛「眞正に左樣だよ。玉江「眞實に左樣でございますとも、第一御柔しくつて、實がおゝり遊ばしますよ。お愛「それはお前の云ふ通りだけどもね、玉江、あゝ云ふ御容子の好いお方は、妾し見たやうなものは何とも思召すまいと思ふがね。玉江「そんな馬鹿な事がございますものか。お愛「彼方は何とか思し召して下さつても、阿父さまや阿母さまは御承知あざるまいと思ふと、妾しは心配で〳〵あらないわ玉江「

大丈夫でございますよ、この間から妾しが薄々旦那さまに申しあげて置きましたから。お愛「玉江、ほんとうにお前は親切だねね、妾しはお前を奉公人とは思はない、眞身の姉だと思ふよ。玉江「もう不可ません、今度は其手は御免蒙むりませう。お愛「あら、今度こそ眞實だよ」。此時久兵衛は、往きしなよりは少し元氣の体にて登場。お愛「あら、阿父さま、御歸りで御座いましたか、さぞ御寒うございましたろう。久兵「あゝ、如何も外は酷い寒氣だ、時にあの阿母さんは御歸宅におつたかな。お愛「いゝ、未でございます。久兵「左樣か、それでは」と、少し思案の体なりしが。久兵「まあ、善は急げじや、兎に角話しをするとしやうが、お愛、お前に喜ばせることがあるよお愛「へゝ、御芝居へでも連れて行て下さいますの。久兵「いや、そんな事

じやあい」。玉江側より口を出し。玉江「薩摩芋の御馳走で御座いませう。久兵「喧ましい、默つて引込んでろ。玉江「へゐ」。玉江は萎れる、お愛は心がゝりと見へ。お愛「阿父様、如何云ふお咄しで御座いますか。久兵「他でも無いがの、此あいだ玉江から胥の話しがあつたについて、實は私が今或るところへ行つて來たのだがの、無論お前に否やの有る筈はあるまいねへ」。お愛は耻かしそうにモヂ〳〵して居るを、玉江は背後から頻りに衝くと、お愛は思ひ切りて。お愛「はい、阿父様の御思召し次第に。久兵「從ふと云ふのか、それはおか〳〵感心だ、いや、それを聞いてやつと私も安心しました、私も未だ遇ふたことが無いが、ナカ〳〵好い男だと云ふことだよ、お愛にも屹度氣に入るだろふと云ふことだ」お愛は返答おく恥かしがりて、扶の

先をおぶり居る、玉江は例の通り堪らぬ〳〵おりて。玉江「へイ〳〵そりや好い男の段ではございませんよ、御孃樣おんぞは」お愛は袖を引いて止めるにも關らず。玉江「好ふございますとも、まあ私しに委せて御置きあさいまし」と。久兵衛に向ひ。玉江「御孃樣おぞは既う毎日〳〵褒めちぎつて居らつしやるので御座いますよ、御清洒で、御上品で、にやけあいで、御柔和くつて、實があつて、もう〳〵もう妾しどもおぞは、一日でも如彼云ふ御方を御亭主に致したら、其晩死んでしまつても宜しいと存じますよ」と喋舌りつゞけば、久兵衛は合点の行ぬ体にて。久兵「では何か、お愛はもう其婿ごのを知つて居るのか。玉江「御存知の段ではございません、餘り知り過ぎて夢中になつて入つしやるんで御座いますよ。久兵「爾ふかいああ、いや

今の若い者の敏捷いのには實に驚ろいてしまふよ。玉江「妾しは昔しの方の、迂漫おのに驚ろいてしまついたい位でございますよ。久兵「又始めた、口の減らない奴だ、併しまあ娘の氣に入つて居る人から至極結構だ、たしか丈の高い人だそうだの。玉江「爾うでございますねへ、まあ脊の高い方でございませうよ。久兵「身柄もおかゝ好いさうだの。玉江「それは既う立派お御身分だそうで御座いますよ久兵「それに學問もおかゝ出來るそうだ。玉江「左樣でございませうつて久兵「手術もおかゝ旨いさうだ。玉江「へゐ」玉江は少し勝手の違つたらしい返事する。久兵「何しろ、既う醫者の免狀を取つたださうだからの。玉江「へゐ、あ、あの方が。久兵「本人は何とも云はおかつたか、ふむ、自分の手柄を誇らぬところが價値があるお、おかゝ

心だ、今時の若い者には珍らしい心がけだ。」お愛も少々不安心の体にて。お愛「あの、阿父樣、誰がそんお事を申しました。久兵「うむ、今竹内先生が御有つたへゐ。お愛「あの竹内先生が、へゐ彼の方が」と、うゝ、うゝ、たへ氣味にて玉江の方を顧り。お愛「玉江、彼の方は竹内さんを御存知だろうか。玉江「御存知だと申すことは、つい伺ひませんでございましたがね」。久兵衛は笑ひおかゝら。久兵「御存知があるも、御存知があいも有るものか、竹内さんの甥に當る人ださうだよお愛「あの西さんが、竹内さんの甥にあたるんでございますかねゐ」と。頓狂聲で尋ねると、久兵衛も合点の行かぬ体にて。久兵「おに、西さんだ、私は今度貰ふと云ふ婿どんの咄をして居るのだよ。お愛「でございますから。久兵「でございますから解らないぢや無いか、其婿ど

のと云ふのは、竹内先生の甥でやつぱり、お醫者をして居らつしやる、大籔宇齋と云ふ人の御子息で隆と云ふ方だよ、その西と云ふ人の話は聞おかつたぜ。お愛「へゝ」とお愛は呆れ返て居ると、玉江は氣を揉み出して。玉江「旦那さま、それでは大變に話しが違つて居らますよ、御嬢さまや妾しが申しあげたのは、西さまと云ふ法律とやらを遊ばす方の事で、全然で其方とは方角が違つて居るのでございまする。久兵「俺も如何も變だと思つたよ。玉江「夫で何でございますか貴君は如何云ふお約束を遊ばしたので御座います。久兵「如何と云つて、私は萬事竹内先生を信用してるから、是非養子にいただきたいと、左樣云つて來たのさ。江江「へゝ、それで先樣では直ぐ御承知おすつたの御座いますか。久兵「兎に角後刻にか、それとも明日にか、

本人がお愛を見に來る筈だ。玉江「夫じや、まあ未だ極つた譯では無いのでございますね。久兵「まあ極らおいと云へば極らおい樣おものだが、竹内先生は自分の甥の事だから、決して嫌だおぞとは云はせおいと、斯う仰有つてだつた。玉江「それは困りましたね。久兵「おに困る。玉江「いいね、其は結構でございますが、併し旦那さま、貴君はこれ丈の御身代を御有ちにおつて、御醫者さまとは妙お方をお貰ひにおりますお。久兵「ちつとも妙お事はおいでは無いか、私は此通り身体が弱くつて、何時如何云ふ事におるか知れおい身の上だからせめて醫者でも婿にして氣丈夫に此世を送りたいと思ふだけのことさ。玉江「成程、それは一應御道理のやうでは御座いますがね、旦那さま、貴君はほんとうに御身体が御惡いと思召して居らつしやるの

でございますか。久兵「何を馬鹿な事を云ふのだ、身体が何ともなくつて、こんなに弱つてる奴があるものか。玉江「でございますかね、世間には神經と云ふことがございますからね。久兵「馬鹿、世間は如何でも、俺のは竹内先生が毎日御診察の上で、御病氣だと仰有るのだ。玉江「だから、猶ほ怪しうございます。久兵「あゝいへば如斯云ふで、貴樣の相手になつた日には結局が無い、何でも角でも私は大病人だ、今にも知れない重病だ。玉江「御自分で左樣仰有るんだから、まあそれほど確かな事は無いとして、ぢやあ伺ひますがね、旦那さまその御婿さまは何人の御婿さまでございます。久兵「あたりまへよお愛のさ。玉江「お愛のならば。久兵「何だ生意氣な、奉公人の分際として、主人の娘を呼び捨にする奴があるか。玉江「いへ、妾しは姉で

ございます。久兵「なにつ。玉江「あなに、此方の事でございます、その御婿さまが果して御嬢樣のであるならば。久兵「何が果してだよ、利いた風な。玉江「左樣一々御叱りなすつては御話しが出來ませんね旦那さま、それが御嬢さまの御婿さまと云ふことに相場が極りましたら御嬢さまの御爲になる方を御貰ひになるが至當ぢやあ御ざいませんか知らんと。久兵「それは勿論さ、お前が云ふまでもないことだ玉江「ぢやお伺ひますがね。久兵「能く伺ふ女だ。玉江「伺ひますとも伺ひますとも、妾しは貴君の伏見の稲荷の祈禱者だと思つてるんでございますからな。久兵「其處で御伺ひの筋は如何だの。玉江「其筋は、いけません、何だか訓談の腰が折れてしまつた。久兵「難波の接骨醫者へでも行くが可い。玉江「その竹内先生の手には餘りますか知らん

まあ閑話は後廻しとして、御嬢様は何處御惡いんでございますか。久兵「何處も惡くはあるまい、あおお愛」。問れてお愛はおや〳〵お愛、ふィ惡くはございません。玉江「では又伺ひますがね、旦那様、御嬢さまの御爲にと御貰ひあさる御婿様が、どれ程の名醫で居らしやつたところで、御嬢さまが何處も何ともございませんでしたら、一向つまらおいちやございませんか。久兵「娘につまらおくても、私の爲にあるから宜いちや無いか。玉江「では、貴君の御婿さまあのでございますか。久兵「いやに理屈を云ふ奴だの、いゝか、よしんば娘の爲めにはあらおくとも、自分の父の爲めにある養子おら、娘だつてぐづ〳〵云ふ筈が無いではおいか、若し愚圖〳〵云ふ樣おら、それは親不孝だ。玉江「と、仰有れば其樣おやうおものでございますが、御

嬢樣は外の方では御承知がございますまいよ。久兵「承知をしてもしおくつても、こんお好い緣談と云ふものが、又と他にあろふ譯がおいから、何でも承知をさせおけりや、私が承知がおちおい。玉江「貴君には好い緣談でしやうが、御嬢樣にはちつども好くは御座いません。久兵「能くおくとも關はおい、强つて彼女が强情を張れば、彼女を尼にして了ふのだ。玉江「それは不可ません。久兵「不可おくとも關わおい。玉江「御嬢樣は嫌おおとこに添ふよりは、尼になる方がよいと思召しませうけれど、貴君に如何してそんお思ひ切つたことが出來まするか。久兵「出來おくとも關はおい。玉江「夫では御無理でございます。久兵「無理でも關わおい。玉江「それでは餘り無慈悲でございます。久兵「無慈悲でも關わおい、おれは俺の極た夫は、何でも角で

も要たせるのだ。玉江「そんな無法なことが御座いますものか。久兵「何が無法だ。玉江「無法でございますとも、亂暴でございますとも、はい非道でございますとも。久兵「やあ、此奴め、主人に向つて、貴様こそ無法だ、亂暴だ。玉江「無法でも亂暴でも關ひません、主人が解らないことをする時には、之を止るのが奉公人の役でございます久兵「ゑ、生、生意氣なことばかり吐しやがる、貴様と話しをすると腹が立つて〳〵、いよ〳〵病氣が重くなつて了ひそうだ。玉江「なるだけ重くなつて、御嬢様の嫌ひな婿あんぞを貰ふことの出來ない様になる方がようございます。久兵「ゑゝ、もう勘辨がならない、如何してやろう。玉江「さ、如何とも御爲なさいまし、主人の爲には如何やうな難義もさら〳〵厭ひません」と、玉江はあくまでも敵抗し

ますと、久兵衛は禿あたまに湯氣たて〻怒り出す、お愛は中に入りて痛く困りおる体。お愛「玉江つてば、そんな事を云つて、また阿父様の御腹を立てさせては困るじやないか、彼方へ御出よ。玉江「いゝね參りません、旦那様が、玉江私が惡かつた、あんな馬鹿な婿はもう〳〵貰はないと仰有るまでは、決して此座は相去り申さぬ久兵「おのれ、何處まで主人を馬鹿にするつもりだ、もう〳〵誰が何と云つても了簡はならない」と、拳骨をくれんと逐ひかくれば、玉江は又た逸早く逃出し。玉江「あんな馬鹿智を貰ふなんて、御了簡のありなさる内は、誰が何と云つても彼方へは參りません。久兵「ゑゝ畜生、ぶ、ぶち殺すぞ。玉江「に、にげて遣るぞ。久兵「こいつ奴が玉江「足下へお氣をおつけなさいまし。久兵「や、やかましい」と、久兵衛

ますく怒り、今は眼もくらみたる樣子に、玉江打んとす、お愛はそれを取おさへんとす、巴とおりて追ひ廻しおる所へ、後妻のおつぎ年齡の割には、色氣ある服裝にて登場。つぎ「おゝ寒かつた、たゞ今」と、入り來たるを、眼くらんだる久兵衛は玉江と間違つて、したゝかに打据る、不意を打れておつぎはそれへ平座張り。つぎ「あゝいたゝゝゝた」未だ心付ぬ久兵衛は。久兵「痛くも糞もあるものか主人に手向ふ天罰だ」と。無性矢鱈に打据ゆると、お愛は吃驚り、久兵衛の腕にすがり付き。お愛「お、阿父さま。久兵「は、離せ、少し懲りさせおいと。お愛「違ひます、玉江じやございません、阿母さんでございまする。久兵「お前慌惶を喰つてはいけおい、何、何が阿母あさんだ。お愛「あなたが御殿打おすつたのは、阿母あさまで御座いますよ」。おつぎは苦し氣に。つぎ「あゝく、あいたゝゝゝた」此時始めて氣附きたる久兵衛は、猶ほ合点ゆかや。久兵「玉江は何、何處へ行つた。玉江「御前に候ふ」と、玉江は澄して返答すれば。久兵「おのれッ」と、一層久兵衛は激して打んとするを、お愛は辛ふじて引止め。お愛「阿父さま、まあ阿母さまを如何かして御上げおさいまし。御可哀さうに何の罪も無いものを」おつぎは猶も苦し氣につぎ「あゝ痛い、あゝ苦しい」この体に驚ろいた久兵衛は、あわてゝおつぎの側へ駈寄り。久兵「こ、こいつは大變だ、つぎ如何した〳〵」。おつぎは苦しそうに嗚咽きしあがら。つぎ「如何したでは御座いません妾しが此室へ入つて來ると、突然に棒で以て」。側からお愛は氣の毒そうに。お愛「ほんとうに妾しは吃驚りしましたわ」。おつぎは怨めし

氣に久兵衛を睨めつけ。つぎ「貴夫、妾しに御氣に入らぬ事がございますから、口でこれ〳〵と云つて下すたつて宜しいぢやございませんか、男らしくもない、他の不在中に相談を極めておいて、無暗に手籠にして了ふあんて、あゝ口惜しい、あゝ殘念だ」と。久兵衛の胸倉を捉る、久兵衛は目を白黑させながら。久兵「こ、これ苦しい何、如何するつもりだ。つぎ「如何するも無いものです、さ、何の恨みで妾しをこんな目に逢せたのです。久兵「う、恨みなんぞは決して有りはしない、間、間違ひだ、あゝ苦しい、堪忍してくれ。つぎ「いゝえ不可ません、間違ひで物事が濟むなら、妾しも間違ひで如斯やるのです。久兵「これお愛、何故爾う迂濶りして居るんだ、阿父さんがこんな目に逢てるのだ、何卒お前から阿母あさんに御詫をしてく

れ」お愛は心中馬鹿々々しいと思ひながら、いと慇懃に兩手を支へお愛「阿母さま、今のは全たく間違ひなのでございましたから、何卒御機嫌を御直し遊ばしていたゞきたう御ざいます、御父さまは全たく玉江と間違ひあすつたのでございますから」。流石氣の毒さに玉江も側から口を出し。玉江「御新造さま、旦那樣は妾しを御打ちあさろうとして、あんな事にあつたので御ざいますから、何卒もう御勘辨遊ばして」兩人の言葉に久兵衛は力を得て。久兵「これ兩人の云ふ通りだから、つぎ、阿母さん許してくれ、た、たのむ、お、拜むつぎ「それぢや兩人に免じて、今度は許して上ますが、小兒じやあるまいし、ちと御氣をおつけあさいまし。久兵「イヤ、如何も濟あかつた、全たくおれが惡かつた、が、一体玉江の奴が。つぎ「玉江がまた如何

か致したので御座いますか。久兵「いや、此奴は實は怪しからん奴だ私を馬鹿にしやがつて、主人を主人と思はおい、怪しからん奴だ、だから私はこれ迄も度々お前に放逐てくれ云つたのだ。つぎ「左樣でございますか、それは飛んでも無いことでございますが、玉江、お前何故そんな失禮なことをするのだ」。玉江は態と驚ろきたる体にて。玉江「あらまあ、飛んだ事を仰有いまし、妾しは決して失禮なことなどを申し上げた事はございませんよ、たゞね、御新造樣、あの旦那樣が御嬢樣に御婿さまを御妾り遊ばそうと仰有いますから、それは不可ません、能く御新造樣とも御相談遊ばしてからでおくとは不可ますまいと、如斯申しあげたのでございますよ、すると旦那さまは直ぐ怒つて御了ひ遊ばすんでございますもの、妾しだつて致し方が

あいぢやございませんか。つぎ「左樣かい、それぢや申し分はありはしないやね、ね、旦那、それでは玉江に無理な處はあいぢやございませんか。久兵「そ、それがお前、彼奴の嘘なのだよ、私に對つて無法だの亂暴だの、いや死んで了へのの」。久兵衛は又も激して來る樣子に、つぎは之を制し。つぎ「既う好うございます、玉江は妾しが後刻で叱つて置きますから、まあ大抵におすつて、まあ御機嫌直して奥庭の離亭へでも御出でおさいまし、今途中で御茶受を取つてまゐりましたから、お茶でも入れませう、さ」が木頭にて、おつぎは久兵衛を起せて。つぎ「旦那入らつしやいましか」と、久兵衛はおつぎに扶けられて上手屋体へ入る、後にお愛は憾めしげに、玉江は冷笑ひを含みおりながら、兩人の後姿を見送る体、宜しくあつて「返し」

場所　同　奥庭

中央に小さい亭を設け、捨椅子二脚を程好き所に置き、上手は植込を隔てゝ木村家座敷の遠見、下手は芝垣にて仕切り枝折門をつけ、垣外は遠く田圃の書割、合方にて道具止ると、久兵衛はおつぎに扶けられながら登場、兩人とも捨臺詞にて椅子に腰をかけ。つぎ「まあ旦那、氣を鎮めて入つしやいませ、御病氣に障りますからね、今小女郎にお茶を入れて來るやうに申しつけておきましたから。久兵「あゝおつぎ。つぎ「はい。久兵「彼の玉江と云ふ奴は、奉公人の分際で不可ない奴だ、あの通り私を馬鹿にするにつけても、私はお前の心の立派なのに感服して居るよ、私はお前が如斯やつて優しくしてくれるから、生きて居られるやうなものゝ、若しお前でもなかつたら、私は彼奴等の爲に、怒り死に死んで了ふだろうと思ふよ、あの玉江と云ふ奴は、一体怪しからん奴だ。つぎ「さあ、爾う貴夫の樣に御怒り遊ばすのよ、それが御病氣にさわる原因でございますから、妾しだつて貴夫御一人が依賴で御座いますもの、萬一の事でもございましたら、如何いたさうかと思ひます」と。空涙こぼして見せかくると、久兵衛は幾度か目をしばたゝき。久兵「あゝお前にこんな苦勞をさせるのも、みんな私の身体が弱いからの事だと思ふと、おれは自分の身体なから、殘念で殘念で堪らない、あゝ如何にかして治る工風はないものかね。つぎ「他ならぬ竹内先生に願つていらつしやるんで御座いますから、その中には屹度御全快でございませう、あんま

り御心配あさらおいが宜ふございますよ。久兵「さあ私も決して氣で氣を病ぬやうにしておる積りだが、人間と云ふものは老少不定だからあ、何時如何云ふことが無いとも云はれおい、それでお前に一寸話しをしておきたいは、お愛に婿をとつて、お前も私も安心することにしたいと、竹内先生の御親類で大藪と云ふ、これも大張お醫者樣の御子息を、いよ〳〵貰ふことに今願つて來たのさ、すると彼のお愛の奴が變な顏をして、煮ね切られい挨拶をするのよ、併しそれだけあら强情に叱りつけても承知させるのだが、あの御饒舌の玉江の奴が側に居て、解らおい理屈を捏かへしては、私の話しをぶちこわさうとしやあがるのよ、それを又たお愛の奴が、大した味方が出來たと云ふ樣な面をして、嬉しさうに聞いて居るのさ、おれは如何

も〳〵、考へ出しても腹が立つてあらおい。つぎ「左樣でしたか、あの玉江は毒の無い女でございますが、たゞ妙にお愛に意地をつけられては。久兵「ところが、お愛の方へ却つて意地をつけてるのだよ。つぎ「まあそれは、如何でも宜しうございますが、では貴君その大藪とか云ふ人の息子を、如何でも御貰ひあさる御心算でございますか久兵「御積りにも御みあしにも、既う約束をして來たのだよ。つぎ「あらまあ、現在女房の妾しにも御話しあさらおいで、あんまり非道いぢや御座いませんか。久兵「女房にだつて、本人の娘にさへ話さおいのだもの。つぎ「本人、本人は好うございますあね、彼娘はどうせ他の云つたことを唯と云つて聽く人ぢやあ御座いませんもの、彼娘は如何でもよろしいと致して、驚きましたねね、如何もまあ驚きまし